

# カロリング期教会改革のバイエルンにおける展開 ザルツブルク大司教アルノ(785[798]-821)の時代を中心に

著者	津田 拓郎
雑誌名	西洋史研究. 新輯
号	34
ページ	77-108
発行年	2005
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/54340">http://hdl.handle.net/10097/54340</a>

# 論文

カロリング期教会改革のバイエルンにおける展開  
——ザルツブルク大司教アルノ（785[798]-821）の時代を中心に——

津 田 拓 郎

『西洋史研究』新輯第34号(2005)抜刷

## 論 文

### カロリング期教会改革のバイエルンにおける展開 ——ザルツブルク大司教アルノ（785 [798]—821）の時代を中心に——

津 田 拓 郎

#### I. はじめに

##### I. (1) 研究史

1969年、W.ウルマンは、いわゆる「カロリングルネサンス」を、一般に「ルネサンス」の語が想起させるような「古典の復活」としてではなく、フランク民衆全体の宗教的再生を目指す運動、つまり社会全体のキリスト教化を目指す運動として捉えるという、斬新な見解を提示した<sup>(1)</sup>。このような考えは、当時のフランク王国を「広義の教会」として捉えた山田欣吾氏の見解と合わせて考えるとより興味深いものとなる<sup>(2)</sup>。ウルマンの言う社会全体のキリスト教的な再生への動きとは、民衆＝一般信徒をも含む「広義の教会」全体をキリスト教化する運動に他ならない。フランク王国は、カール大帝期に急速に領土を拡大し、多様な文化・慣習を持った人々を包含することとなったため、それを一つにまとめ上げる際にキリスト教が大きな役割を果たすことを期待されたといえよう。もちろん、「カロリングルネサンス」が持つ宗教的な特徴はウルマン以前にも指摘されてこなかったわけではない。しかし、ウルマンの見解の重要性は、彼がこの「再生」の動きを、聖職者や知識人のレベルだけでなく、一般信徒である民衆をも巻き込んだ社会全体にかかわるもの、と捉えた点にある。

ウルマンの主張はカロリング期を対象としたその後の研究に大きな影響を与えている。現在多くの研究者が、「カロリングルネサンス」を、一般信徒への宗教教育を通じて社会全体をキリスト教の規範に沿う形に改革する動きとして理解しているといつてよい<sup>(3)</sup>。わが国でも近年、「民衆教化」を主たる対象とした論考がいくつか出されている<sup>(4)</sup>。先行研究は、王権の出したカピトゥラリア<sup>(5)</sup>にあらわれる教会改革の理念を分析し、カール大帝期（768—814）とルイ敬虔帝期（814—840）（特にその前半）に、王権が社会全体のキリスト教化を目的とした教会改革政策を打ち出したことを明らかにした。王権が目指した教会改革の理念は、789年に出されたカピトゥラリア、一般訓令 *Admonitio Generalis*<sup>(6)</sup> の中に最も良く現れており、その内容はすでに多くの研究中で詳細に分析されている<sup>(7)</sup>。従ってここでは、先行研究で明らかにされた改革政策を簡単に概観するとどめたい。

一般訓令に見られる諸々の施策の中で最も強調されていることは、小教区の司祭による説教や模範的振舞いを通じた民衆教化活動である。聖職者の司牧的・教育的役割が強調さ

れ、彼らの質の向上も試みられた。司牧活動を通じて民衆と直接接触する聖職者を監督・調査し、司教座に学校を作る役割が司教に与えられている。司教はいわば改革の現場における責任者の立場に置かれたのである。さらにカピトゥラリアの中には、民衆教化に直接関わるもの以外にも、教義や典礼などの宗教的慣行の統一、教会組織の整備など、極めて多岐にわたる施策が規定されているが、それらはすべて一つの「キリスト教的価値観に沿って矯正された社会」を作り出す試みとして理解することができる。

### I. (2) 問題の所在

このような改革は王国全土で一様に行われたのだろうか。それぞれの司教が改革の責任者としての役割を与えられていたのであれば、それぞれの司教区に対象を限定した上で、改革理念の現実における展開を検討することで、カロリング期教会改革の意義に迫ることができると考えられる。これまでの研究では、改革に対する王国各地の反応が概観されることはあっても、在地での改革の展開を深く掘り下げるような分析が行われることは少なかったように思われる。そのような試みが行われる場合であっても、対象とされる地域はライン・ロワール間の王国の中心部とされる部分のみであった。

しかし、カピトゥラリアや司教カピトゥラリアの伝存状況からは、王国の中心部以外でも教会改革が積極的に行われていたことがうかがえる。モルデクによるカピトゥラリアの伝来写本目録<sup>(8)</sup>をもとに作成された、地域ごとのカピトゥラリアの伝存状況を表1に示した。また表2は、カピトゥラリアを伝える写本の中でも特に教会改革の在地での展開を示すものとして重要な、いわゆる「手引書写本」<sup>(9)</sup>の伝存状況であり、表3は司教カピトゥラリアのMGH版<sup>(10)</sup>における写本一覧に基づいた司教カピトゥラリア<sup>(11)</sup>を伝える写本の伝存状況である。これらの表から明らかになったことは、ライン・ロワール間の王国中心部と並んで、バイエルン<sup>(12)</sup>からも9世紀前半を中心に多くの写本が残っていることである。また、残されている写本のほとんどが「手引書写本」である点も興味深い。もちろん、写本の散逸の可能性を考えると、この調査結果は暫定的なものに過ぎないし、カピトゥラリア、司教カピトゥラリアを含まない形で伝えられている手引書写本も数多く存在しているが、それらはここでは考慮されていない。しかし少なくとも9世紀前半には王国中心部のみならずバイエルンにおいても積極的な改革活動が展開されていたことは間違いないといえ、この地域における教会改革の展開を検討することにも一定の意義を見出せるものと思われる。

本稿では、ザルツブルクの初代大司教アルノ（位785-821、798年以降大司教）の在位期を主たる対象に、王権の目指した教会改革が、改革の現場である小教区や一般信徒にまで伝えられる様子を明らかにする<sup>(13)</sup>。その中で、先行研究中で明らかにされた王国中心部における改革の展開との相違も指摘される。本稿で得られた知見は、アルノ以降の教会改革の展開を検討するための基礎となるだけでなく、カロリング期教会改革の意義そのもの

を問う際の手がかりともなるものであると思われる。

表1 カロリング期に出された国王のカピトゥラリアを含む写本の伝存数<sup>(14)</sup>

	9世紀前半	9世紀後半	10世紀	合計
ザルツブルク大司教区	11	1	7	19
マインツ大司教区	15	6	7	28
トリアー大司教区	1	0	1	2
ランス大司教区	3	13	3	19
トゥール大司教区	5	2	0	7
サンス大司教区	1	3	0	4
ブルジュ大司教区	1	0	0	1
リヨン大司教区	0	1	1	2

表2 国王のカピトゥラリアを含む「手引書写本」の伝存数<sup>(15)</sup>

	9世紀前半	9世紀後半	10世紀	合計
ザルツブルク大司教区	7	0	3	10
マインツ大司教区	12	1	4	17
トリアー大司教区	1	0	0	1
ランス大司教区	3	7	0	10
トゥール大司教区	1	0	0	1
サンス大司教区	1	1	0	2

表3 司教カピトゥラリアを含む写本の伝存数<sup>(16)</sup>

	9世紀前半	9世紀後半	10世紀	合計
ザルツブルク大司教区	4	1	3	8
マインツ大司教区	1	5	2	8
トリアー大司教区	1	1	0	2
ランス大司教区	0	5	3	8
トゥール大司教区	0	1	0	1
リヨン大司教区	0	1	0	1

# I. (3) 本稿で用いられる史料について

カピトゥラリアは、カロリング期の研究においてもっとも頻繁に用いられてきた史料類型と言ってよい。それは、教会改革研究においても同様である。しかし近年、カピトゥラリアに対する認識は大きく変わってきており、教会改革を検討する際にも、最新のカピトゥラリア理解を踏まえる必要があるだろう。

この史料に関しては、ガンスホーフによる、「通常そのテキストが条項（capitula）に分かれ、カロリングの支配者たちが立法あるいは行政措置を公知させるために用いた、国家権力の布告」<sup>(17)</sup>という定義からも分かるように、従来その法的・行政的側面のみに注目が集まることが多かった<sup>(18)</sup>。しかし、近年ではカピトゥラリアの中の宗教的要素に大きな注目が集まっている<sup>(19)</sup>。確かにカピトゥラリアの中には、純粋に世俗・行政的な事柄のみを扱うものも存在する<sup>(20)</sup>。しかし、ほとんどのカピトゥラリアの中では聖・俗の問題がと

もに扱われており、それどころか、純粹に宗教的問題のみを扱うものすら見られるのである<sup>20)</sup>。

カピトゥラリアは近代の「法」とは全く異なった性質を持っていた。「カピトゥラリアの法的有効性」は19世紀以来長い間議論的となってきた問題であるが、近年 T.M. ブックがその議論の方向を大きく変える見解を提示している。彼はカピトゥラリアの「宗教・司牧的特徴 religiös-pastoralen Dimension」に注目し、それを勅令や命令のような「立法的・規範的 gesetzgeberisch-normativ」なものとして捉えない<sup>21)</sup>。そのように考えた場合、カピトゥラリアは、強制可能な法ではなく、支配者による訓戒としての性質を強く持つものとなる。もちろんすべてのカピトゥラリアが宗教的な訓戒として理解されるわけではないだろう。カピトゥラリアの役割は、どのような写本の中に記録されているのかによって変化するからである。一般訓令は、部族法典などの法史料と共にカピトゥラリアを伝える写本中でも、手引書写本中でも伝えられている<sup>22)</sup>。前者の事例において、一般訓令は明らかに「法」として写本に取り入れられている。後者の場合にのみ、カピトゥラリアが支配者の訓戒として扱われ、在地での教会改革活動の手引として用いる目的で写本に取り入れられたと考えることが可能であろう<sup>23)</sup>。

手引とされ得たのは国王のカピトゥラリアだけではない。この時代、教会会議決議とカピトゥラリアは明確に区別されていなかった<sup>24)</sup>。また、司教カピトゥラリアと国王のカピトゥラリアも、発布者という大きな違いはあるものの、その内容、形式の点で国王のカピトゥラリアと異なっておらず<sup>25)</sup>、しばしば写本中でも両者が渾然一体となって伝来している<sup>26)</sup>。従来の研究では、カピトゥラリア、司教カピトゥラリア、教会会議決議がそれぞれ別々に考察の対象とされることが多かった<sup>27)</sup>。しかし、それらのテキストはすべて、改革の現場における手引としての役割を果たし得たものである。それゆえこの時代の教会改革を検討する際には、この種の手引となったテキストをすべて考慮する必要があるのではないだろうか。本稿は、カピトゥラリアに類似した、司牧の際の手引とされた可能性のある訓戒的な性質を持つテキストをできる限り広く考察の対象とする。そこには教会会議決議、カピトゥラリア、司教カピトゥラリア、大司教による教会会議でのスピーチや司牧教書が含まれる。その際特に注意されることは、それが教会会議決議なのかカピトゥラリアなのかという違いではなく、王国レベル、大司教区レベル、司教区レベルといったテキストの対象とする範囲である。それにより王国レベルのカピトゥラリア・教会会議決議に見られる理念が、小教区や一般信徒まで伝えられていく様子が明らかになることと思われる。

## II. 前史：大公領時代から大司教座設立までの時期の教会組織化の動き

788年までバイエルンは大公により支配されており、8世紀半ば以降はフランク王国から半独立状態にあった<sup>28)</sup>。この地域には8世紀以前からキリスト教が持ち込まれていたが、本格的な教会の組織化はボニファティウスの活動によってはじまるといってよい<sup>29)</sup>。その

ときの様子を、彼と教皇の間の書簡が伝えている。ボニファティウスによると、彼がバイエルンで活動を始めた当時、そこには一人の司教（おそらくパッサウ司教ヴィヴィロ）しかいなかったらしい。739年の教皇グレゴリウス3世の書簡によると、ボニファティウスはバイエルンをザルツブルク、レーゲンスブルク、フライジング、パッサウの4つの司教区に分割し、3人のアングロ・サクソン人を新たに司教に任命した<sup>60</sup>。ここで重要なことは、ボニファティウスが「大公オディロの認可とともに」4司教座を確立したことである。大公は、領内でのボニファティウスの活動を支援することで教皇との結びつきを密にして、教会政策へのフランク側の干渉を排除し、バイエルンの独立を保つことを試みた。この時期のバイエルン教会の組織化は教皇・ボニファティウス・大公のイニシアティブのもとで行なわれている。しかしこの時点でバイエルン大公領内での教会改革がそれ以上展開することはなかった。バイエルンの教会の頂点にいたのは大公であったため、大司教座の設立は必要とされなかった<sup>61</sup>。さらにオディロの後を継いだタシロ3世（位749-788）は、司教座よりも修道院を重視する政策をとったため<sup>62</sup>、司教座を中心とした教会組織の形成が進まず、司教や司祭の司牧的役割が強調されることもなかった。

タシロ時代の教会会議決議からは、タシロの教会政策が見て取れる。タシロが大公であった時期からは3つの教会会議決議が残っているが、756年ごろのアッシュハイム教会会議にはタシロよりも司教たちの意向が大きく現われている。この教会会議は、タシロが未だピビンの後見下にあった時、またはピビンに臣従を誓い後見を脱した直後に行なわれたものであった<sup>64</sup>。決議は、聖職者たちによる大公に対する嘆願書の形式をとっており<sup>65</sup>、大公領の統治の際の聖職者の役割が強調されていて、司教の地位の向上を目的とする規定が目立つ<sup>66</sup>。また、十分の一税の支払い義務（第5条）、近親婚の禁止（第13条）に関する決議も見られ、同時代のピビンの政策と対応するものとなっている<sup>67</sup>。これらの政策は、カール大帝による一連の教会改革政策の中へも受け継がれていくこととなるものであった。

それに反してバイエルンがフランク王国から半独立状態にあった時期に開かれた、770年ごろのディンゴルフィング教会会議<sup>68</sup>と771年のノISING教会会議<sup>69</sup>には、大公の意向が大きく反映されている<sup>40</sup>。それは、決議の形式そのものにも現れている。アッシュハイムのように聖職者たちが大公や世俗の有力者らに呼びかけるのではなく、会議の決議をもとにした大公による勅令の形式を取っているのである<sup>41</sup>。タシロ自らがイニシアティブをとって開催したこれらの教会会議活動の中では、もはや司教の地位の向上の動きは目立っていない。そこには教会関係の決議だけでなく、世俗の事柄に関する決議も含まれており、特に貴族への優遇政策が目につく<sup>42</sup>。この2つの教会会議決議は、バイエルン部族法典の補足としての性質を持つものであり、一般信徒への司牧のために用いる手引とはされなかった<sup>43</sup>。ここには、一般訓令に現われるような、司教を中心とした一般信徒への司牧活動、民衆活動への動きは見られない。

788年のタシロの失脚以降、バイエルンはフランク王国に完全に併合されることとなり、カールの義理の兄ゲロルド1世が辺境伯・プラエフェクトゥスに任命された<sup>44)</sup>。しかしそれだけでは、この地域を完全にフランク王国内に組み込むためには不十分である。一般訓令を見ても分かるように、フランク王国の統合原理はまさにキリスト教であった。カールにとって、新たに獲得したこの地域の教会の組織化を進め、社会全体のキリスト教化を進めることは不可欠の課題であったといえるだろう。

この時期に、バイエルンの諸司教座は経済的に豊かになっていく。カールは791年から793年までバイエルンに滞在し、征服の後処理に努めている。この時、以前に大公からレーンとして受け取っていた財産がすべて、司教座・貴族らにみとめられ、大公に優遇されていた私有修道院はその多くが王権や司教座の傘下に入ることとなる<sup>45)</sup>。しかし、この時期においても、一般訓令に見られるような教会改革の積極的な推進は見られない。その理由としては、791年からアヴァール遠征が本格化したことが挙げられるだろう<sup>46)</sup>。しかしさらに、バイエルンの司教たちが必ずしもフランク寄りではなかったことも原因と考えられるかもしれない。従来の研究においてアギロルフィング期からすでに親フランク的であったとされていた、ウオジーヅペ出身のフライジング司教アット（位783-811）について、近年の研究においては、カールの征服直後に彼がカロリング家の支配を非難する態度をとっていることが指摘されている<sup>47)</sup>。また791年の前任者シントベルト（位768-791）のアヴァール遠征での戦死の後、レーゲンスブルク司教に任命されたアダルヴィン（位791-816）は、これまで考えられていたように宮廷サークル出身なのではなく、前任者と同じドナウガウに基盤を持つ有力貴族出身であった<sup>48)</sup>。バイエルン併合後も、カールは自らの腹心を送り込むのではなく、在地貴族家門から司教を選んでいるのである。王権と個々の司教との間の関係は、王国中心部と異なり必ずしも親密であったとはいえなかった。

しかし、ザルツブルク司教のアルノは例外である。ここで彼の経歴を簡単にまとめてみよう<sup>49)</sup>。彼は、740年ごろに、バイエルンの有力貴族家門であるファガナー族の近親家系に生まれた。758年にフライジング司教ヨセフス（位748-764）に預けられ、遅くとも776年にはその地で司祭職についている。778年ごろにアルノは、フランク王国内のサンタマン修道院に入り、782年にそこの修道院長となった。そのころ彼はカールの宮廷サークルと親密な関係を持ったようだ。785年に彼はザルツブルクの司教となる<sup>50)</sup>が、彼の司教への昇進の背景にはカールの影響力があったのだろう。しかし彼はタシロと対立していたわけではない。787年、タシロはカールと自身の紛争の調停を教皇に依頼するという重要な任務をアルノに与えた。この試みは失敗に終わるものの、アルノとフランク国王・大公との関係が悪化することはなかったと考えられている。バイエルンの併合から10年後、アヴァール遠征も一段落した798年に、アルノは教皇レオ3世からパリウムを受け取り、フライジング、レーゲンスブルク、パッサウ、ゼーベン、ノイブルクを属司教座として持つ<sup>51)</sup>大司教となった。ここでの教皇の役割は形式的なものであり、実際のイニシアティブ



を取ったのは明らかにカールであった<sup>62</sup>。アルノの大司教位への昇格の背景を巡っては様々な議論がなされているが<sup>63</sup>、バイエルンの貴族出身であると共にフランク宮廷との関係も深かった彼がバイエルンの大司教にもっとも適した人物であった、ということに疑いの余地はないだろう。以前から政治的中心地であったレーゲンスブルク<sup>64</sup>ではなくザルツブルクが大司教座に昇格したことについても、アルノ個人と宮廷の結びつきが大きな役割を果たしたと考えられる<sup>65</sup>。アルノが大司教となった798年以降、バイエルンでは、一般訓令の理念に従った教会改革が本格的に展開していくこととなる。以下で、その様子を具体的に検討していきたい。

### Ⅲ. 教会改革の展開

#### Ⅲ. (1) 王権による改革理念の大司教区への伝播

一般訓令や王国規模の教会会議決議の中に見られる改革理念は、どのようにして各地の司教たちに伝えられたのだろうか。バイエルンにおいては、それぞれの司教と王権が直接接触するのではなく、大司教たるアルノを介してそれぞれの司教区に改革理念が伝えられている。

そのための方法として第一に挙げられるのは、カピトゥラリアが発せられる場でもあった王国規模の教会会議への参加である。ただし、この時代のほとんどの教会会議決議は、参加者の署名を欠く形で伝えられており、どの教会会議に誰が参加したのかを正確に知ることは困難である<sup>66</sup>。アルノが参加したと考えられている王国規模の教会会議は、801年から802年にかけて開かれた一連のアーヘンでの教会会議<sup>67</sup>、806年の帝国分割計画の際のディーデンホーフエンでの会議などである<sup>68</sup>。さらに彼は、813年に王国の5ヵ所で同時に開かれた改革教会会議の一つ、マインツ教会会議において、ケルン大司教ヒルデバルドゥス、マインツ大司教リクフスと並んで司会を務めたことが分かっている<sup>69</sup>。これらの教会会議は、一般訓令に見られる教会改革政策の再確認が行われ、それがさらに発展させられる場でもあった<sup>69</sup>。アルノはバイエルンの司教たちを代表して、この種の王国レベルの教会会議に参加していたのである。

さらにアルノは、国王の使節としての活動を何度も行っており、カールが彼に大きな信頼を置いていたことがうかがえる<sup>69</sup>。797年末、彼は、アキレイア総大司教パウリヌス、サントニ修道院長ファルドルフらと共に、カールによってローマへと派遣され、いくつかの任務を果たした。800年には、パーダーボルンへと逃れていた教皇をローマへと送るという重要な任務を、ケルン大司教ヒルデバルドゥスと共にに行っている。彼は同年末に再びローマへ行き、カールの皇帝戴冠にも立ち会っている。彼が皇帝の信頼を受けていたことは、811年に出されたカールの遺言書からもわかる<sup>69</sup>。彼は、ケルン大司教ヒルデバルドゥス、マインツ大司教リクフスに次いで3番目に署名しているのである。アルノはカール個人とも頻繁に接触できる位置にあったといえるだろう。

彼は国王巡察使にも任命されていた。巡察使制度とは、複数の伯管区を包摂する程度の広さを持つ「巡察管区」を設け、それを聖俗各1名の使者によって巡回させるもので、彼らは国王の代権者として、紛争の調停、伯の監督、王領地の管理などを行なった。さらにカピトゥラリアの伝達と実行もその職務に含まれる<sup>63</sup>。いわゆる巡察使カピトゥラリアにおいて巡察使が自身の管区で徹底させるべきことが述べられており、そこから教会改革における彼らの役割が明らかになる。例えば、810年の巡察使カピトゥラリアでは、「聖職者一人一人が、自身の品級に応じて、自身に委ねられた民衆に説教を行い、彼らに教育を施すよう努めるべきである」と定められている<sup>64</sup>。すでに述べたように、説教を通じた民衆教化は一般訓令に見られる教会改革の中でもっとも強調されているものの一つである。一般訓令に見られる教会改革を、自身に割り当てられた管区で徹底させることが巡察使に期待されたのである。彼らは、行政面における役割とともに、教会改革においても大きな役割を持っていた。アルノは791年以降国王巡察使として頻繁に史料に現れるようになる<sup>65</sup>。彼は、パッサウ、フライジング、レーゲンスブルクなどで活動しており、その管轄区域はザルトブルク大司教区とほぼ一致していたと考えられる<sup>66</sup>。巡察使としてのアルノの地位は、大司教区内での教会改革を推進するためにも好都合だったものと思われる。

このようにアルノは、教会会議への参加、国王の使節団への参加、巡察使活動を通じて王権と頻繁に接触する機会を持っていた。さらに、宮廷サークルの中心人物であり、教会改革の推進者の一人と考えられているアルクインとも、彼は個人的な関係を持っていた。アルクインがアルノに送った多くの書簡がそれを示している。その中では、一般訓令を想起させるような改革理念が繰り返し説かれている。たとえば790年の書簡では「自分自身について考え、向かうべき所を知り、行うべきことをあらかじめ確かめ、自身についてのみならず、自身の指導に委ねられている一つ一つの魂について、恐ろしい審判人の前で報告することとなるのだということ[を考えるように]、何度も繰り返しお願いし、勧告します。それゆえ、熱心に働き、折が良くても悪くても、つまり望むものにもそうでないものにも、説教し、とがめ、戒め、励ましてください」<sup>67</sup>、と述べ、アルノに司牧的な役割を果たすよう促している。アヴァール人への伝道に関する796年の書簡では、「あなたは、十分の一税の徴収者であるのではなく、信仰の説教者たるべきです」、と助言している<sup>68</sup>。アルノが大司教になった後の800年の書簡では、「平和と愛の中に暮らすわれわれの兄弟たち全員に、そして我らが父、司教アリム<sup>69</sup>に、そしてあなたの他の同僚の聖職者たちによりよくお伝えください。常に彼らを説教の職務へと促してください。使徒の座からバリウムを受け取ったとき、あなたはより大きな荷を受け取ったのであり、あなたはすべての人間、すべての身分に、自信を持って神の言葉を説教する義務を持っている、ということをお忘れないように」<sup>70</sup>、として、司牧活動と大司教としての配下の聖職者の統制を再確認している。アルクインとの頻繁な文通が、アルノによるバイエルンでの教会改革への取り組みの際に大きな役割を果たしたことは間違いない。

以上からバイエルンにおいては、王権の改革理念を各地に伝える際にアルノの果たした役割が大きかったことが分かる。王国規模の教会会議への参加、国王の外交使節への参加、巡察使としての活動を通じて王権と緊密に接触し、王宮における改革の推進者アルクインとの個人的な友情関係を持っていたことで、アルノは教会改革への意識を大いに高めたことと思われる。このようにして王権の改革理念を受け継いだ彼は、大司教区内の司教たちにそれを伝えていくこととなる。

### Ⅲ. (2) 大司教区内での教会改革の展開：大司教区会議

アルノを中心として、各々の司教たちに改革理念・改革政策が伝えられる場として機能したのは、主として大司教区会議であった。一般訓令13条では、「教会管区の司教たちに対して、教会の諸問題[を取り扱う]ために、[管区の]首都大司教と共に年間に2度教会会議を開くべきこと」が定められている<sup>70)</sup>。表4は、アルノの時代にバイエルンで開催されたことが知られている大司教区会議の一覧である。798年から811年までの間に少なくとも6回<sup>71)</sup>の大司教区会議が開かれたことが分かる。さらにカロリング期の教会会議決議の中では例外的に、バイエルンの教会会議は参加者が明らかになっているものがほとんどである。その中で第一に目に付くのは、俗人の不在である。俗人の参加が記録されているのは、テーゲルンゼー修道院長とフライジング司教の間の争いの調停を記録した804年のテーゲルンゼーの会議のみである。大公時代とは異なり、俗人支配者たるプラエフェクトゥスやグラーフの参加は認められない。以前まで大公が座っていた主催者の位置には、大司教のアルノがついたものと思われる。会議に参加しているのは、ザルツブルク大司教座の属司教と修道院長、そしておそらく開催地の聖職者らである。このような大司教区会議は、大司教を中心にしてそれぞれの司教区内での教会改革の実践を再確認しあう場として機能した。また、この種の会議は大司教区内での紛争の調停が行なわれる場でもあった。大司教区会議は、巡察使でもあったアルノが属司教や修道院長たちに自らの権威を示す場としても役立ったと思われる。

表4 アルノの時代の大司教区会議の一覧

開催地	時代	参加者	備考
不明 <sup>73)</sup>	798-800	不明	アルノが <i>Instructio Pastoralis</i> を出した時の教会会議 <sup>74)</sup> 。決議は伝わっていない。
ライスパッハ、 フライジnk、 ザルツブルク <sup>75)</sup>	799?	ゼーベン司教アリム、ザルツブルク大司教アルノ、パッサウ司教ワルドリッヒ、フライジnk司教アット、ノイブルク司教シントベルト、レーゲンスブルク司教アダルヴィン、6人の修道院長、4人の司祭、4人の首席司祭、2人の助祭。	47条の決議が伝来。
テーゲルンゼー <sup>76)</sup>	804	ザルツブルク大司教アルノ、フライジnk司教アット、司教アダルハルドゥス(司教座不明)、 <i>vocatus episcopus</i> ヒルティゲルス、2人の修道院長、2人の首席司祭、2人の司祭、6人の修道士、3人の伯、1人のケンテナリウス他。	テーゲルンゼー修道院長とフライジnk司教の間の争いを調停する短い記録が伝来。教会会議かどうかは不明。
フライジnk? <sup>77)</sup>	805	具体的な人名はない。「バイエルン州の司教、修道院長、他の教会人らの聖なる教会会議」 <sup>78)</sup> 。	大司教区会議で決議された祈禱兄弟盟約について述べる部分のみ伝来。
レーゲンスブルク <sup>79)</sup>	806	ザルツブルク大司教アルノ、フライジnk司教アット、レーゲンスブルク司教アダルヴィン、パッサウ司教ハット、ゼーベン司教ハインリッヒ、(アイヒシュタット司教?) アグヌス、テーゲルンゼー修道院長メギンハルト、2人の司祭。	証書中で <i>publico conventu episcoporum seu etiam presbiterorum</i> として言及されている。アルノが <i>Serm.</i> を読んだ会議?
ザルツブルク <sup>80)</sup>	807	ザルツブルク大司教アルノ、フライジnk司教アット、レーゲンスブルク司教アダルヴィン、ゼーベン司教ハインリッヒ、パッサウ司教ハット、6人の修道院長。	十分の一税の分割法についての決議のみを含む記録が伝来。
フライジnk <sup>81)</sup>	811?	ザルツブルク大司教アルノ、フライジnk司教アット、レーゲンスブルク司教アダルヴィン、パッサウ司教ハット、ゼーベン司教ハインリッヒ。	証書中で <i>publico conventu episcoporum seu abbatum comitum</i> として言及されている。

アルノの時代の大司教区会議に関する史料のうち、教会改革政策を具体的に伝えるものを表5にまとめた。*Instructio Pastoralis* は、アルノの大司教昇格直後の798-800年の間に開かれたと推測される開催地不明の大司教区会議で出された、18条からなる司牧の手引である<sup>82)</sup>。各条項は比較的長く、一つの条項で複数の問題が扱われる場合も多い。教会会議の決議そのものではなく、アルノが自ら作成し、大司教区会議の参加者達に贈ったものと考えられている。司教カピトゥラリアが、基本的に司教区内の司祭に向けられているのにたいし、このテキストが呼びかけている対象は主に司教である。司教はその内容を自らの司教区内の聖職者に司教区会議で伝えることになっていた。大司教区会議の決議は、799年にライスパッハ、フライジnk、ザルツブルクで開催されたもののみが完全な形で残っている。第1条から第5条までがライスパッハ、第6条から第31条までがフライジnk

ク、第32条から第47条までがザルツブルクでそれぞれ決議されたものと考えられている<sup>83)</sup>。

表5 大司教区会議の内容を伝える史料

史料名	時代	史料の性格	条項数	略称
Instructio Pastoralis <sup>84)</sup>	798-800	大司教区会議の際に出された、属司教宛ての司牧教書。	18条	Past.
ライスバッハ、フライジnk、ザルツブルク教会会議決議 <sup>85)</sup>	799?	大司教区会議決議。	47条	Conc.R.F.S.
教会会議説教 <sup>86)</sup>	806-811 <sup>87)</sup>	大司教区会議の開催前に読み上げられた文書。	5条 <sup>88)</sup>	Serm.

これら2つの史料には、一般訓令以来王権が目指してきた教会改革への取り組みが大きく現れている。一般訓令の中で最も強調されていたことは、司祭による説教活動を通じた民衆教化であった<sup>89)</sup>。ここでも多くの条項は、聖職者たちが一般信徒に教えるべき事柄に割かれている。Instructio Pastoralisの第11条には、「司教はその信徒たちに、正しい信仰を保ち、聖なる復活を信じ、審判の日をおそれ、かつて行った善行・悪行が自らに戻ってくることを信じるべきであり、それらを疑ってはならない、といつても訓戒すべきである」<sup>90)</sup>、とある。しかし説教は司教に限定されたものではなかった。第4条では「司祭たちが…ローマの教会の伝統に従って教えることができ、カトリックの信仰を論じ、自身に委ねられた民衆を教え、ローマの伝統がわれわれに伝えるごとくに慣行に従ってミサを挙げる、ということに司教は注意を払うべきである」<sup>91)</sup>、として、司祭の説教活動を監督する役割が司教に与えられている。説教の内容として求められたことは、基本的なカトリックの教義ではなかった。第5条ではさらに説教されるべき内容として、教会に通って祈禱に専念すること、奉納物を捧げること、姦淫・偽証・盗み・偶像崇拜・異教的な宣誓を避けること、十分の一税を支払うことが規定され、罪人に対しては、正しく贖罪をおこなうことを教えるべきとされている。799年の大司教区会議からも一般信徒に教えらるべきであった内容が明らかになる。第5条は、すべての聖職者が水曜と金曜に肉とワインを控え、第9時に連禱を行うことを決定した上で、「民衆の中で説教が行われるべき時に、訓戒と勧めを通じて、もしくは何らかの折を見て、このことをわれわれが民衆に説くことができるように」<sup>92)</sup>と定め、一般信徒にも水曜と金曜の断食を勧めることを求めており、第16条では「すべての司祭たちは、民衆に罪深い宣誓の慣行を避けるように教えるべきである」<sup>93)</sup>として、アルノのPastoralisの内容が繰り返されている。また、第4条は年に4回の施しをおこなうことを<sup>94)</sup>、第15条は首席司祭が異教的慣習の根絶に努めること<sup>95)</sup>を、第23条と第46条は信徒の結婚に関する事柄を<sup>96)</sup>、第33条と第34条はすべての信徒が四旬節に月曜・水曜・金曜の行列に参加することをそれぞれ定めた。このように、司祭には、信徒たちに基本的な教義を教え込むだけでなく、彼らの生活慣行すべてをキリスト教的なも

のにしていく役割が求められたのである。さらに教化活動は、言葉による説教に加えて聖職者自身の模範的生活によっても行なわれるべきであった。Instructio Pastralis 第2条では「言葉よりも彼[司教]から生じる種々のよき行いのほうが従うものたちを教えるほど」<sup>(97)</sup>の善行を示すべきとされており、同様の規定は第6条や799年の会議の第39条にも見られる<sup>(98)</sup>。

このような説教や模範的振舞いを通じた民衆教化の実践のためには、小教区の聖職者の質の向上が欠かせなかったため、それに向けた施策もとられている。司教は、配下の聖職者が正しい本を読み理解すること<sup>(99)</sup>、女性と暮らさないこと<sup>(100)</sup>、利子付きでものを貸さないこと<sup>(101)</sup>に注意を払わなくてはならなかった。首席司祭を通じて他の聖職者の質を保つことも求められている。また、Pastralis の第8条では、「司教一人一人が、自身の都市に学校を作り、ローマの伝統に従って教育し、読書に専念でき、考えを(?)判断できる、聡明な教師をそこにおくべきである」<sup>(102)</sup>と定められており、ここには学校の設立を規定した有名な一般訓令第72条が反映されている。さらに司教は年に2度司教区会議を開催すべきであり、そこは「彼ら[配下の聖職者]がどのように振舞うべきか、どのように民衆に教えるべきかを訓戒する」<sup>(103)</sup>とともに、「彼らがどのように生活し、どのように民衆を教え、洗礼を与えているかを調査する」<sup>(104)</sup>場であった。また、新たに聖職者に叙階されることを望む者たちに対しても調査が行なわれるべきであり<sup>(105)</sup>、非自由人は、解放された場合のみ聖職に就くことが許された<sup>(106)</sup>。これらの試みに加えて、聖職者を俗人と明確に区別するための施策も見られる<sup>(107)</sup>。このような聖職者内部の改革は、それ自体が目的ではなく、民衆教化を円滑に進めるための手段として取り組まれたものであった。

聖職者内部の規律を正し、一般信徒への宗教教育を円滑に進めるためには教会組織の拡充が不可欠である。史料からは、大司教区会議で大司教を中心として教会の組織化が進められたことが明らかになる。聖職者は世俗の裁判所に行ってはならず<sup>(108)</sup>、司教に助言を求めるべきであり、司教が解決できない場合には大司教が、それでも解決できない場合には国王の裁判所へと訴えるべきであった<sup>(109)</sup>。この時代の教会が、国王を頂点として、大司教、司教、下位の聖職者というヒエラルキーからなる、という理念がこの規定には良く現われている。さらに大司教の権限も明確化された。Pastoralis の第13条でアルノは、「司教は首都大司教がいなかったところではいかなる処置も下さないよう注意し、毎年開催される首都大司教区の長が取り仕切る教会会議に参加することを怠らないように」<sup>(110)</sup>と定めている。それぞれの司教区内の組織化も試みられた。司教は、すべての小教区に洗礼教会を作り<sup>(111)</sup>、司教区の財力と民衆の数に応じて司祭を配置して、彼らの管轄領域を明示すべきであった<sup>(112)</sup>。定まった司教区に属さない聖職者は、教会の組織化の妨げとなると考えられたため、他地域の聖職者や放浪聖職者の活動を認めないこと<sup>(113)</sup>が求められた。十分の一税や信徒からの奉納物の正しい分割を監督する役目も司教がになった<sup>(114)</sup>。それに加えて、修道院を世俗から完全に分離する試みも行なわれ、小教区の司牧活動からも修道士が排除され

ている<sup>107)</sup>。社会全体のキリスト教化政策と並行して、このような教会の組織化とそれぞれのヒエラルキーの明確化も試みられたのである。これらすべての中に、一般訓令に始まる王権の改革理念が反映されている。

さらに、大司教から司教への改革理念の伝達を示す史料として、アルノが806年(?)の大司教区会議で司教たちを前に読み上げた説教のテキストが残されている<sup>108)</sup>。このテキストは、編者のポコーニーによって大きく5つの部分に分けられており、最後の2つの部分は大司教区会議の決議の断片であると考えられている。アルノによる説教の中心は第3の部分であり、そこでは、カール大帝からの書簡の文言を借用しつつ<sup>109)</sup>、799年の大司教区会議の断食規定が見直されている。799年の会議の第5条では、聖職者が水曜と金曜に肉とワインの断食を行い、それを一般信徒にも勧めるよう決議されていたが、定められた祝日やイースターから聖霊降臨祭までの時期は断食が免除されていた。ここでは、「いまや、他の日々と同じく…これらの日々[イースターから聖霊降臨祭までの時期]にも断食を行うことを命じる権威が見つけられた」<sup>110)</sup>ため、聖職者は定められた祝日を除くすべての水曜と金曜に第9時までの断食を行い、俗人は「彼らが望むのであれば、または模範や喜ばしい説教によって彼らを説き伏せることが出来たら」<sup>111)</sup>金曜に断食を行うべきとされている。また、遠方からの来客の場合や、病人、断食が不可能なほどの仕事に従事しているものについては断食が免除され、日々厳しい労働に従事しているものたちは第6時までの断食でよいとされている。労働の厳しさによって断食の免除や軽減を行う措置は、799年の大司教区会議の決議やカールの書簡には見られず、説教の作者であるアルノが独自に生み出したものであると推測できる。ここからは、アルノが、王権の望む措置や以前の大司教区会議での決議を、在地の状況にあわせてより現実的な形へと展開させていることが分かる。大司教区会議での決議・訓戒は、現実において実行されることを第一に目的としていたのである。

第4の部分はおそらく806年の大司教区会議決議からの抜粋であり、ここからはこの時期のバイエルンに未だ異教的慣習が根強く残っていたことが分かる。「動物の病気、疫病、その他の病、または他の様々な災害の際に」<sup>112)</sup>、神や魔術を用いない医者へと助けを求めるのではなく、「邪悪な男や女、予言者、女魔法使い、占い師、誤った書物、どこかの木や泉」<sup>113)</sup>へと助けを求めることがあってはならない、ということを、司祭が民衆に訓戒するよう求められているのである。799年の大司教区会議第15条に見られた異教的な人々が未だに活動していたことをこの規定は示しており、大司教区会議では首席司祭が調査・審問すべきであるとされていたが、今度は民衆のほうに訴えかける施策がとられている。

第5の部分も会議決議からの抜粋と考えられる。ここでは、「司祭や聖職者に対して、『今、肉を食べよう私に命じて、私のために1つのミサと、たくさんの詩篇を歌うように』と要求して、与えられた贖罪を守ろうとしない」<sup>114)</sup>俗人の慣行が非難され、それを行わないように彼らに教えることが求められている。贖罪の断食を逃れるために、配下の司祭にミ

サを挙げさせ詩篇を歌わせる、私有教会領主が非難されているのだと思われる。

これら2つの、アルノの説教とともに残された大司教区会議決議からの抜粋は、とりわけ在地での問題に大きくかかわるものであったために記録されたものと思われる。異教的慣行の残存や私有教会の弊害が、教会改革の大きな妨げになっていたことがわかる。これらの問題は、一般訓令以来、王権も様々な対策を講じてきた問題であった<sup>(93)</sup>。ここでは、より具体的に、在地の状況を踏まえた上でそれらの問題が扱われている。

これらの史料の内容が一般訓令の影響を大きく受けていることは明らかであろう。大公領時代の教会会議決議では、民衆教化や聖職者の司牧的役割がこれほど強く打ち出されることはなかった。大司教アルノは、大司教区会議において王権の意向を属司教や修道院長たちに伝え、彼らと共に決議を行った。そこでは一般信徒への宗教教育を通じた社会全体のキリスト教化政策と並行して、教会の組織化と大司教の権限の明確化も行われている。詳しい史料が残されていない大司教区会議においても、改革政策の決議・再確認が行われたものと思われる。アルノは大司教区組織を利用して王権の改革政策を大司教区内に広め、司教たちの改革意識を高めることを試みた。それでは、それぞれの司教たちは、司教区内でどのように改革を実行にうつしたのだろうか。以下では、各司教座から残されている教会改革の動きの痕跡をたどってみたい。

### Ⅲ. (3) それぞれの司教座における反応

司教区内での動きを伝える史料は、司教カピトゥラリアである。9世紀前半のバイエルンからは2つの司教カピトゥラリアが残っている。Capitula Bavarica は、ザルツブルク大司教アルノカレーゲンスブルク司教アダルヴィンによって司教区（ザルツブルクの場合は狭義の大司教区）内の人々に向けて出された15条の司教カピトゥラリアである<sup>(94)</sup>。この史料は740-750年の間の教会会議決議であると考えられていたが、その見解は現在認められていない<sup>(95)</sup>。序文には、「私の愛するものたち、我らが主イエスキリストの栄光によって、この聖なる祝祭にあなたがたは集まっているのだから、聖なる父たちとわれわれの兄弟たち、[つまり]教会の人々が、彼らの教会会議で、守るべきだと定めた事柄を布告することが良いと思われる」<sup>(96)</sup>とあり、このテキストが祝日の集会の際に読み上げられたこと、王国レベル、または大司教区レベルの教会会議決議<sup>(97)</sup>がもとになっていることが分かる。すべての条項が信徒の望ましい振舞いを規定したものである。しかし、テキストの中では、司祭によって一般信徒に教えられるべきこととして、3人称複数で述べられている部分<sup>(98)</sup>と、直接信徒に語りかけている部分<sup>(99)</sup>が混在している。教会会議決議の規定から司教区に適した部分を抜粋したものに、テキストの作成者が独自の加筆を行なう過程の中で、このような混乱が生じたものと思われる。大半の条項は、司祭が信徒に教えるべきこととして規定されている部分であり、この司教カピトゥラリアがもともとは司教区会議で聖職者たちに向けて出されたものであったとも推測される。また、このようなテキストは、小教区



の司祭が信徒へ説教をする際の手引としても役立ったことだろう。

表 6 司教区レベルの史料（司教カピトゥラリア）

史料名	時代	作成者	条項数	略称
Capitula Bavarica <sup>(12)</sup>	813以前	ザルツブルク大司教アルノまたはレーゲンスブルク司教アダルヴィン	15条	Cap. B
Capitula Frisingensia tertia <sup>(13)</sup>	9世紀前半 (9世紀第二四半期)	不明(ザルツブルク大司教区内の人物)	37条	Cap. F. III

この司教カピトゥラリアには、王国・大司教区レベルで決議・訓戒された内容が大いに反映されているが、その内容は作成者によって改変されている場合も多く、独自の規定も見られる。第7条「[[信徒たちは]完全に邪悪な宣誓の慣行を避けるよう努力すべきである」<sup>(14)</sup>、第12条「あらかじめ、司祭と、彼ら[結婚を望む男女]の間の親戚関係を調査することが出来るその親類や隣人に報告する」<sup>(15)</sup>ことなしには結婚することが許されない、第14条「[[信徒たちは]正しい杓と正しい計量器ないしは秤を持つべきである」<sup>(16)</sup>、第15条「[[信徒たちは]巡礼者と客人を自身の家の中に受け入れるべきである」<sup>(17)</sup>などの規定は、それぞれ、799年の大司教区会議第16条<sup>(18)</sup>、同23条<sup>(19)</sup>、一般訓令第74条<sup>(20)</sup>、同第75条<sup>(21)</sup>を踏まえたものと思われる。第2条は他の条項と比べると長いものであり、司祭が信徒に教えるべきこととして、性的不道徳を避け、罪の告白と贖罪で最後の審判に備え、臨終の聖体拝領・告白を行なうことが述べられており、条項の途中からは直接信徒に語りかける文体になっていて、聖職者による説教が意識されたものとなっている。第8条から第11条までは施しと断食を定めたものであるが、大司教区会議決議やアルノの教会会議説教の内容が独自に改変されている。ここでは、「[[信徒たちは]水曜と金曜の断食を慣習とすべきである」<sup>(22)</sup>と定められ、水曜と金曜の断食が一般信徒にまで拡張されている<sup>(23)</sup>。また、四季の斎日の規定も若干改変された。信徒は、「枝の主日の前の土曜、聖霊降臨祭の[前の]土曜、この月[9月]の第4土曜ないしはこの祝日、我らが主の誕生日の前夜」<sup>(24)</sup>に施しを行なうとともに、その週の水曜と金曜には第9時まで断食を行って、土曜の第9時に教会に来るべきとされた<sup>(25)</sup>。また、この司教カピトゥラリアの作者による独自の規定としては、俗人も教会会議に参加すること<sup>(26)</sup>、教会に頻繁に通うこと<sup>(27)</sup>、俗人も酩酊を避けるべきであること<sup>(28)</sup>が挙げられる。第6条は、ギリシャ人、ローマ人、フランク人らが毎週聖体拝領を行っている一方で、多くのものが一年以上それを行っていないことを嘆いており、第3、第4日曜には聖体拝領を行うべきであると定めている<sup>(29)</sup>。これらの独自の規定は王国レベル、大司教区レベルでみられた改革理念から大きく逸脱するものではなく、民衆教化というその基本的な方向性は維持されている。改革理念を受け継ぎつつ、在地の状況や司教の関心にあわせた形で改革が展開されていると考えることが出来るだろう。

この時期のバイエルンから現存するもうひとつの司教カピトゥラリア、*Capitula Frisingensia* IIIは、以前まで *Capitula Frisingensia* の名前で知られていた史料で<sup>(90)</sup>、全37条を含んでおり、作成者は不明である。作成された時代について、プロマーは漠然と9世紀前半としているが<sup>(91)</sup>、ポコーニーは9世紀の第二四半期と考えており、それが正しければアルノの時代以降に作成されたものということになる<sup>(92)</sup>。第35条では「洗礼教会の司祭一人一人が上述のカピトゥラリアを羊皮紙に書き写して持つように私は望む。神の助けによって私が彼の教会に着いた時に、私の訓戒と命令が、彼自身と彼のもとにいる民衆の間で守られているのを見つけられるように」<sup>(93)</sup>と規定されており、小教区においてこのテキストが手引として用いられることを司教カピトゥラリアの作成者が望んでいたことが分かる。このような要求は、小教区の司祭の間にまで広く文字文化が浸透していることが前提とされるものであり、このことは、この司教カピトゥラリアの作成された時代が、改革が始められた時期であるアルノ時代よりも、それが定着した次の世代に属するとの印象を与える<sup>(94)</sup>。

この司教カピトゥラリアの中には、聖職者が女性と暮らすこと、酩酊することの禁止(第5条)、高利貸しの禁止(第10条)のような大司教区会議や *Capitula Bavarica* と共通した規定が多く見られるが、それまでの規定をより発展させたものも目立っている。たとえば第6条では、説教の規定がより具体的なものとなっており、「2,3週ごとの主日や祝日に」<sup>(95)</sup>、ミサの中で「福音が読み上げられた後に」<sup>(96)</sup>説教が行われるとされ、いつでもどこで説教が行われるべきかが明確にされている。また、従来司教に対してのみ要求されていた書物の誤りを正す作業<sup>(97)</sup>が司祭にも求められ(第3条)、司祭がどのような書物を所有し理解すべきなのかも明確にされた(第32条)<sup>(98)</sup>。上述の第35条と並んでここからも文字文化の発展が前提となっているのである。司教区内の組織化もさらに進められた。司祭の封臣化への対策(第22条)<sup>(99)</sup>、司祭が一人で複数の教会を持つことの禁止(第33条)により、私有教会の聖職者に一定の質を保つことが試みられている。さらに、他の司祭たちを統轄する立場の司祭もすでに存在したようだ(第8条、第14条)<sup>(100)</sup>。加えて、司教による巡察が行なわれていたことが第35-37条から明らかになる<sup>(101)</sup>。特に第37条ではカピトゥラリアの作者たる司教が各々の小教区に到着した時に、その洗礼教会の司祭が彼の世話をすべきであると述べられている。このことは、司教座の周辺だけではなく、遠隔地にも小教区教会が作られていたことを示唆している<sup>(102)</sup>。

これらの司教カピトゥラリアからは、大司教区会議で決議・訓戒された、民衆教化、聖職者の質の向上、教会の組織化といった政策がそれぞれの司教に受け継がれたこと、司教たちが自らの司教区内でそれを実行に移そうと試みていたことが明らかになる。大司教区会議が、改革理念を司教に伝える場として有効に機能していたことを示しているといえるだろう。さらに司教カピトゥラリアを作成した司教は、自らの司教区の状況を踏まえた上で大司教区レベルの決議・訓戒を改変し、独自の規定も行っている。アルノの死後のも

のと思われる *Capitula Frisingensia* III には、大司教区レベルでの内容を大いに発展させた施策が多く見られ、司教個人のイニシアティブにより教会改革が進められていることが分かる。

司教区レベルでの改革の展開を示す史料は上述の司教カピトゥラリアだけではない。いくつかの手引書写本には、聖職者が知るべきことを列挙したテキストが見られる。これらは、一般訓令や大司教区会議で求められた聖職者の調査に用いられたものと考えられる<sup>(90)</sup>。

表 7 聖職者に対する調査に用いられたと考えられるテキスト

史料名	時代	作成者	史料の性格	条項数
<i>Capitula de examinandis ecclesiasticis</i> <sup>(90)</sup>	800–810 ごろ <sup>(90)</sup>	ザルツブルク大司教アルノ?	巡察使が行う調査の草稿。	17条
<i>Capitula Frisingensia prima</i> <sup>(90)</sup>	813 ごろ	不明	聖職者が学ぶべき物事のリスト。	15条
<i>Capitula Frisingensia secunda</i> <sup>(90)</sup>	800–810 ごろ	フライジnk 司教アット?	司教による司教区内の聖職者に対する調査。	7条
<i>Interrogationes examinationis</i> <sup>(90)</sup>	803–813 ごろ	レーゲンスブルク司教アダルヴィン? <sup>(90)</sup>	司教による司教区内の聖職者に対する調査。	12条

*Capitula Frisingensia* I は、「すべての聖職者が学ぶよう命じられた」<sup>(90)</sup>ことを列挙した短い条項からなる作者不明のリストで、アタナシウス信経、使徒信経、主の祈り、秘蹟の書物、悪魔祓い、贖罪規定書、ローマ式の聖歌、司牧についての書物の理解、正しいミサの挙行、主日・祝日の説教の実施など、基本的な司牧活動に関しての要求が行われている。*Interrogationes examinationis* は司教が司教区会議または司教区内の巡察の際に行なった司祭に対する質問集であり、*Capitula Frisingensia* I とほぼ同様の内容が問われた<sup>(90)</sup>。これらの内容は、一般訓令70条で求められているものとよく一致している<sup>(90)</sup>。

この種のテキストの成立状況を考える上で、*Capitula Frisingensia* II は興味深いものである。これは、ボレティウスのカピトゥラリアの版に含まれている *Capitula de examinandis ecclesiasticis* からの抜粋からなる小教区司祭の調査のための質問表であり、*Capitula de examinandis ecclesiasticis* とともにフライジnkの手引書写本中で伝えられている<sup>(90)</sup>。*Capitula de examinandis ecclesiasticis* の性質については多くの見解が出されてきたが、現在では巡察使が皇帝の意向を巡察使管区に伝える際に用いた文書であると考えられている<sup>(90)</sup>。そして、このテキストを用いたのは、この地域で巡察使として活動していたザルツブルク大司教アルノであったと推測される<sup>(90)</sup>。*Capitula Frisingensia* II からは、皇帝の意向が、巡察使・大司教を通じて司教やその配下の聖職者に伝えられる様子が明らかになる。これまで *Capitula Frisingensia* II は、*Capitula de examinandis ecclesiasticis* の単なるコピーとみなされ、十分な注意を払われることは少なかった<sup>(90)</sup>。し

かしボコーニーは、抜粋のやり方には作者（編者）の明確な意図が表れていることを明らかにした<sup>(77)</sup>。一般信徒に向けられた11-16条、修道士に向けられた17条は抜粋の対象からはずされており、小教区の在俗聖職者にたいする調査に適したテキストのみが編集されたのである。司祭が司教に従順であり、尊敬を持って接することについての6条、7条が転載されていないこともこの考えに合致する<sup>(78)</sup>。Capitula Frisingensia IIの作成者は、巡察使（大司教）による調査書をもとにして、自らが配下の聖職者を調査するためのテキストをも作成したのである<sup>(79)</sup>。ここでも王権の意向が大司教アルノを介して属司教や小教区の聖職者へと伝えられている。

フライジングの司教区では、司教区会議が定期的にかれた痕跡が残っている。大司教区会議によると、毎年2回、それぞれの司教区で教会会議が開かれるべきであった<sup>(80)</sup>。フライジングの司教区から残された証書集からは、800年から830年の間に最低でも16回の司教区会議が開かれたことが分かる<sup>(81)</sup>。そしてそれらのほとんどは5月または9/10月に開かれており、そのことは定期的に司教区会議が開催されていたことを示唆するものであるといえるだろう<sup>(82)</sup>。ザルツブルク大司教区内の司教座のうち、フライジングのみで司教区会議が活発に開催されていたと考える理由は見当たらないため<sup>(83)</sup>、その他の司教区でも会議が開かれていた可能性が高い。司教区会議は大司教区会議で決議・訓戒された改革政策が小教区の聖職者に伝えられる場として機能したものと思われる。

大司教区会議での決議・訓戒を受けた司教たちは、その内容を盛り込んだ司教カピトゥラリアを出した。それにより小教区で働く聖職者に一般信徒への宗教教育を促すと共に、彼らの質の向上が図られたのである。司教たちは、巡察などの際に聖職者たちに対して望ましい知識や振舞いについての調査をおこない司牧活動を徹底させるとともに、年に2度の司教区会議を開催して、配下の聖職者たちの掌握に努めた。これらの知見からは、バイエルンの司教たちが王権の目指す教会改革政策を積極的に実施しようと試みていることが分かる。

カールの目指した教会改革において、実際に信徒と接する立場にある小教区の司祭たちは、説教や模範的な生活態度で一般信徒に宗教教育を施し、ミサへの出席、十分の一税の支払いなどのキリスト教徒らしい生活態度を实践させることを期待されていた。しかし小教区の聖職者たちがそれらの任務をどれだけ実行に移したのか、信徒たちの内面にどれだけの影響が与えられたのかを伝える史料は存在しない。聖職者に対する試験の内容からは、当時の聖職者の質がかなり低かったことが推測される。このような状況下では、一般信徒の内面までを完全にキリスト教化するという意味においては、カールの試みが成功するのは困難であったのかかもしれない。

#### IV おわりに

以上から、9世紀初頭のバイエルンにおいては、大司教アルノを中心として、司教や配

下の聖職者にまで改革理念が伝えられたことが明らかになったものと思われる。在地に勢力を持つ貴族家門出身であったバイエルンの司教たちは、もともと必ずしも親フランク的ではなかった。カールの王国統治においては司教が重要な役割を与えられていたため、アルノの大司教座昇格以前の数年間、カールは司教座を優遇する政策をとり、司教たちを自らに引き寄せることを試みている<sup>(1)</sup>。この時期にバイエルンの諸司教座では、カールの目指す改革を行うのに十分な物質的資源が準備されたといえる。しかしそれだけでは、王国中心部と同じように司教を中心として改革が進められるためには不十分であった。宮廷から遠く離れたバイエルンで改革が進められるには、大司教アルノという推進力が必要とされたのである。自らも在地貴族出身でありながら王権と結びつきの強かった彼は、バイエルンの司教たちに王権の意図を徹底させるのに最も適した人物であったといえる。アルノは大司教であると同時に巡察使であったため、司教や世俗の有力者に対する裁判・監督権を持っており、このことも司教たちに改革政策を実行に移させるのに有利に働いたことだろう。アルノの属司教たちは、民衆教化政策を進める中で配下の聖職者の掌握と教会の組織化を進め、それまで以上にその権威を高めていく。そしてバイエルンの司教座が農村部の私有教会や土地財産を獲得していく反面、大公や在地貴族が設立した修道院はその設立家門から切り離されて、王権直属の修道院となるか司教座の傘下に入り保護を獲得する必要に迫られていくこととなる<sup>(2)</sup>。民衆教化政策は、司教や聖職者による一般信徒への影響力をも高める結果をももたらすものであっただろう<sup>(3)</sup>。この時期にバイエルンの教会組織は、大公時代の修道院を重視するものから、フランク王国中心部のような司教座中心のものへと変わったといっていよいだろう。その意味ではアルノのもとでの教会改革を通してバイエルンの王国への真の意味での統合がもたらされたともいえる。

807年以降、バイエルンで大司教区会議が開かれた痕跡は途絶える。しかし、それぞれの司教座において、アルノ時代に決議・訓戒されたテキストを含む手引書写本が最も活発に作成されるのは、アルノの次の世代の司教たちが活動する9世紀の第二四半期の時期である。アルノの大司教昇格と同時に始まった教会改革は、この時期に最高潮に達するといっていよい。そして、アルノ時代のように大司教を推進力として改革理念が司教座・小教区に伝えられていくのではなく、それぞれの司教のイニシアティブで改革が行なわれるようになったことが推測される。その時期バイエルンの諸司教座は、東方への伝道活動でも重要な役割を果たすこととなり、司教座にはさらに多くの富が集積されていく。アルノの時代に行われた教会改革の動きは、バイエルンの司教座のその後の発展の出发点に位置づけられるものであろう<sup>(4)</sup>。

## 註

(1) Walter Ullmann, *The Carolingian Renaissance and the Idea of Kingship*, London, 1969.

(2) 山田欣吾『『教会』としてのフランク帝国——西ヨーロッパ初期中世社会の特色を理解するために——』、同『教

会から国家へ：古暦のヨーロッパ』創文社 1992年所収 pp.19-84.

- (3) 近年の傾向としては、この時代の教会改革への動きを、ウルマンのように「生まれ変わり」と見るのではなく、矯正 *correctio/emendatio* による改革 *reformatio* と捉え、「カロリングルネサンス」という呼称それ自体の不適合性を強調するものが目立っている。例えば Philippe Depreux, 'Ambitions et limites des réformes culturelles à l'époque carolingienne', *Revue historique* 307-3 2002, pp.721-753. このような主張は、ウルマンの説をいくらか修正するものではあっても、それを否定するものではなく、基本的な方向性としてはウルマンのものが踏襲されているものと思われる。一般信徒への宗教教育を扱ったものとしては、Guy Devailly, 'La pastorale en Gaule au IX<sup>e</sup> siècle', *Revue d'histoire de l'Église de France*, 59, 1973, pp.23-54; Pierre Riché, 'La pastorale populaire en Occident, VI<sup>e</sup>-IX<sup>e</sup> siècles', idem, *Instruction et vie religieuse dans le haut moyen âge*, London, 1981 pp.195-221; Thomas L. Amos, *The Origin and Nature of the Carolingian Sermon*, Ph.D.diss., Michigan State University, 1983; Jean Chélini, 'L'instruction du populus christianus', idem, *L'aube du moyen âge : Naissance de la chrétienté occidentale*, Paris, 1991, pp.84-100. また、「カロリングルネサンス」や教会改革全般を扱ったものとして Rosamond McKitterick, *The Frankish Church and the Carolingian Reforms, 789-895*, London, 1977; J. M. Wallace-Hadrill, 'Reform and its application', *The Frankish Church*, New York, 1983, pp.258-303; Giles Brown, 'Introduction: the Carolingian Renaissance', R. McKitterick (ed.), *CAROLINGIAN CULTURE: emulation and innovation*, Cambridge, 1994, pp. 1-51.
- (4) 五十嵐修「カロリング朝の民衆教化——その理念と現実——」、『西洋史学』第147号, 1987年 pp. 34-49; 多田哲「カロリング王権と民衆教化——『一般訓令』(789年)の成立事情を手掛かりに——」、『西洋史学』第178号, 1995年 pp. 45-58; 同「カロリング王権による民衆教化政策の展開——カル大帝とリエージュ司教ゲルバルドゥスの関係を中心に——」、『歴史学研究』第688号, 1996年 pp. 17-31; 同「9世紀前半リエージュ司教区における民衆教化——リエージュ司教とサン・テュベール修道院の関係を通して——」、『史学雑誌』第105号-9, 1996年 pp. 41-64; 同「リエージュ司教と民衆教化——『ゲルバルドゥス蒐集』(806年)に見られる司教の施策——」、『西洋史研究』新輯第26号, 1997年 pp. 144-158; 小田内隆「キリスト教徒俗人教化」、『西欧中世史』上 ミネルヴァ書房 1995年所収 pp. 115-140; 阿部謹也『西洋中世の罪と罰——亡霊の社会史——』弘文堂 1989年(特にpp. 146ff). 多田氏は「民衆教化」を、「すでに洗礼を受けて形式的にはキリスト教徒である俗人を、宗教的に教育、教化していくこと」と定義している。多田哲「カロリング王権と民衆教化」p. 46.
- (5) カピトゥラリアは、モルデクにより「フランクの支配者に由来する、ほとんどが章に分けられたテキストで、立法的、行政的、宗教・教育的性質を持った命令、布告、公式の通達」と定義されている史料である。Hubert Mordek, 'Karolingische Kapitularien', *Studien zur fränkischen Herrschergesetzgebung*, Frankfurt am Main-Berlin-Bern-Bruxelles-New York-Oxford-Wien, 2000, pp. 55-80, p. 57. カピトゥラリアの性質については I. (3)「本稿で用いられる史料について」を参照。なお、本稿では「カピトゥラリア」と表記する場合、基本的に国王のカピトゥラリアのみを指す。
- (6) Alfred Boretius (hrsg.), *Monumenta Germaniae Historica, Capitularia regum Francorum*, I, Hannover 1883(=MGH. Cap., I.), pp. 53-62, no.22.
- (7) 一般訓令や、その他の教会会議決議、カピトゥラリアに見られる改革理念については、Rosamond McKitterick, *The Frankish Church and the Carolingian Reforms*, pp. 1-44; J. M. Wallace-Hadrill, 'Reform and its application', pp.258-278; Thomas L. Amos, *The Origin and Nature of the Carolingian Sermon*, pp.139-192; Giles Brown, 'Introduction: the Carolingian Renaissance', pp.11-28; Philippe Depreux, 'Ambitions et limites des réformes

- culturelles à l'époque carolingienne', pp.727-737; 五十嵐修「カロリング朝の民衆教化——その理念と現実——」; 多田哲「カロリング王権と民衆教化——『一般訓令』(789年)の成立事情を手掛かりに——」. また, 一般訓令は河井田研朗氏により邦訳されており, 詳細な注解が試みられている. 「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis)(七八九年)の試訳」, 『ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所年報』第27号, 2005年 pp.117-150; 同「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis)(七八九年)の注解(1)」, 『福岡大学人文論叢』第36号-4, 2005年 pp.1-23.
- (8) Hubert Mordek, *Bibliotheca capitularium regum Francorum manuscripta. Überlieferung und Traditionszusammenhang der fränkischen Herrschererlasse* (MGH Hilfsmittel, 15), München, 1995.
- (9) 「手引書写本」とは一般訓令の理念を受け継いで, 信徒に対する司牧活動や聖職者の教育の際に参照する目的で作成されたもので, 主の折りや使徒信経, 贖罪規定書, 説教などの文書と共にカピトゥラリアを伝えているものである. すでにマキタリックは, カピトゥラリアや司教カピトゥラリア(この史料については註11を参照)が, 司牧の際の手引として用いられるような写本中で伝来していることを指摘していた. Rosamond McKitterick, *The Frankish Church and the Carolingian Reforms*, pp.1-79. さらに, カピトゥラリアを伝える49の写本を検討したビューラーは, カピトゥラリアを伝える写本には, 部族法典と共にカピトゥラリアが伝えられているものと, 様々な教会関係の史料と結合されているものが存在することを明らかにした. Arnold Bühler, 'Capitularia Relecta: Studien zur Entstehung und Überlieferung der Kapitularien Karls des Großen und Ludwigs des Frommen', *Archiv für Diplomatik Schriftgeschichte, Siegel- und Wappenkunde*, 32, 1986, pp.305-501, pp.340ff. 後者の写本が本稿で言うところの「手引書写本」にあたるものである. 王権の試みた教会改革が, 聖職者や一般信徒への宗教教育を重視するものであったことを考えるのであれば, 「手引書写本」の存在からその地における積極的な改革活動を推測できるだろう.
- (10) Peter Brommer(hrsg.), MGH., *Capitula episcoporum*, I, Hannover, 1984; Rudolf Pokorny und Martina Stratmann(hrsg.), MGH., *Capitula episcoporum*, II, Hannover, 1995; Rudolf Pokorny(hrsg.), MGH., *Capitula episcoporum*, III, Hannover, 1995(=MGH., *Cap. episc.*, III).
- (11) 司教カピトゥラリアとは, 一般訓令の影響を受けて, 各地の司教が配下の聖職者に向けて出したものである. 司教カピトゥラリアはほぼすべてが, 教会関係の史料とともに編纂された写本中で伝来している. 司教カピトゥラリアについては, Rosamond McKitterick, *The Frankish Church and the Carolingian Reforms*, pp.45-79; Peter Brommer, *Capitula episcoporum: die bischoflichen Kapitularien des 9. und 10. Jahrhunderts*, Turnhout(Belgium), 1985.
- (12) 初期中世におけるバイエルンは, 現代のバイエルンとオーストリアの3分の2ほどを含む領域であり, おおまかにいってレヒ川以東, フィヒテル山脈・オーパープファルツ・ボヘミア山脈以南, アルプス以北(ボルツァーノ付近の地域まで)の地域のことであり, 東へは征服・伝道により漸次拡大していく. 798年以降はザルツブルク大司教が管轄する教会州と一致することとなる. Paula S. Fichtner, 'Art. Bavaria', *Dictionary of the middle ages*, II, New York, 1982-1989, pp.132-135, p.132; *Atlas zur Kirchengeschichte*, Freiburg-Basel-Wien, 1987, pp.34\*f, p.46.
- (13) この時代のバイエルン教会を対象とした研究で, 本稿の関心と照らして重要と思われるものは, 一連の教会会議を概観する Wilfried Hartmann, 'Die bairischen Konzilien der Zeit Arnos von Salzburg', *Die Synoden der Karolingerzeit im Frankenreich und in Italien*, Paderborn, 1989, pp.141-151; Kurt Reindel, 'Bayerische Synoden im 8. Jahrhundert', *Bayern vom Stamm zum Staat*, München, 2002, pp.1-18. ザルツブルクの首都大司教座昇格の背景と伝道活動を考察する Brigitte Wavra, *Salzburg und Hamburg Erzbistumsgründung und Missionspolitik in karolingischer Zeit*, Berlin, 1991, 特に pp.35-200. 大公制からカロリング王国への編入という転換期において司教の果たした役割

の変遷を検討する Stephan Freund, *Von den Agilolfingern zu den Karolingern*, München, 2004 などである。しかし管見によれば、バイエルンを対象に、一般訓令にはじまる教会改革の展開を扱った研究は見られない。なおこの時期のザルツブルク、バイエルンの状況に関しては, Heinz Dopsch, 'Die Zeit der Karolinger und Ottonen', idem (hrsg.), *Geschichte Salzburgs*, Band I/1, 1983, pp.157-228; Herwig Wolfram, *Die Geburt Mitteleuropas: Geschichte Österreichs vor seiner Entstehung*, Berlin, 1987が参考になる。

(14) Hubert Mordek, *Bibliotheca capitularium regum Francorum manuscripta. Überlieferung und Traditionszusammenhang der fränkischen Herrschererlasse* をもとに作成。9, 10世紀の写本で作成地がほぼ確定されているもののみ。イタリアのものは除外した。

(15) ここでは表1に含まれる写本のうち、教父の論考、教会法、典礼関係の史料、説教、主の祈り・使徒信経、司教カピチュラリアなどと共に国王のカピトゥラリアが伝えられている写本を手引書として数えた。

(16) *MGH. Cap. episc.* I-Ⅲのそれぞれの司教カピチュラリアの *Überlieferung* の部分をもとに作成。9, 10世紀の写本で作成地がほぼ確定されているもののみ。イタリアのものは除外した。司教カピトゥラリアと国王のカピトゥラリアがともに含まれる写本に関しては、表2と重複して数えられている。

(17) François Louis Ganshof, *Recherches sur les capitulaires*, Paris, 1958, pp. 3f; idem, *Was waren die Kapitularien?*, Weimar, 1961, p.13.

(18) 特に、MGH版の編者であるボレティウスによる、部族法典付加勅令、巡察使勅令、独立勅令というこの史料の分類と、賦課勅令=人民法、独立勅令=王法とする理解をめぐって多くの議論が行わた。ボレティウス学説とその批判については、大久保泰甫「カピトゥラリアの法的性格」1-4、『法学協会雑誌』第81号-4, pp.309-372; 第85号-5, pp.701-737; 第85号-11, pp.1503-1546; 第85号-12, pp.1617-1674 (1965-8年) に詳しい。

(19) 特にこの点を強調しているのがモルデクである。Hubert Mordek, 'Karolingische Kapitularien', pp.55-59; idem, 'Art. Kapitularien', *Lexikon des Mittelalters*, V, München&Zürich, 1991, pp.943-946。さらに Thomas Martin Buck, *Admonitio und Praedicatio: Zur religiös-pastoralen Dimension von Kapitularien und kapitulariennahen Texten (507-814)*, Frankfurt am Main 1997, p.12も参照。ウルマンらカロリングルネサンスを宗教的に捕らえる論者たちも同様の視点でカピトゥラリアを検討しているといえる。上述の註(3)を参照。

(20) 例えば *Capitulare de villis* (*MGH Cap.*, I, pp.82-91, no.32) や *Capitulare missorum de exercitu promovendo* (*MGH Cap.*, I, pp.136-138, no.50)。

(21) もっとば宗教的な事柄のみを扱うカピトゥラリアの代表が一般訓令 (*MGH Cap.* I, pp.53-62, no.22) である。

(22) Thomas Martin Buck, *Admonitio und Praedicatio*, p.13.

(23) Hubert Mordek, *Bibliotheca capitularium regum Francorum manuscripta* に含まれる諸々の写本を参照。

(24) 手引書写本については註(9)を参照。なおカピトゥラリアを伝えるすべての写本がビューラーの述べたこの2つの類型にはっきりと区分されるわけではない。Hubert Mordek, *Bibliotheca capitularium regum Francorum manuscripta* からは、教会法収集とともにカピトゥラリアを伝える写本や、カピトゥラリアと教会会議決議のみからなる写本も存在することが分かる。

(25) 写本の中でカピトゥラリアと教会会議決議は必ずしも明確に区別されていない。Arnold Bühler, 'Capitularia Relecta', pp. 440f. このことは、MGHのカピトゥラリア、教会会議決議の両方の版に含まれるテキストが少なくないことからもうかがえる。テキストの形式においてもカピトゥラリアと教会会議決議は大きく類似している。Mordek, 'Karolingische Kapitularien', pp.59-61。さらに、一般にカピトゥラリアが出される場であったとされるいわゆる王国集會は、教会会議と明確に区別されておらず、多くの教会会議の決議がカピトゥラリアとして発布さ



- れた。Wilfried Hartmann, *Die Synoden der Karolingerzeit im Frankenreich und in Italien*, pp. 4f, pp. 9f; Buck, *Admonitio und Praedicatio*, p.35; Carine van Rhijn, *Shepherds of the Lord, priests and episcopal statutes in the Carolingian period*, Proefschrift Universiteit Utrecht, 2003, p.29.
- ②⑨ Thomas Martin Buck, *Admonitio und Praedicatio*, p.31; Peter Brommer, *Capitula episcoporum: die bischoflichen Kapitularien des 9. und 10. Jahrhunderts*, p.11.
- ③⑦ Arnold Bühler, 'Capitularia Relecta', pp. 440f.
- ③⑧ ラインは、これまでの研究がカピトゥラリアのみに大きな関心を寄せており、教会会議決議が軽視されていたと指摘する Carine van Rhijn, *Shepherds of the Lord*, p.30.
- ③⑨ アギロルフィング家の大公によるバイエルンの支配については、森義信「初期中世バイエルン史研究序説——アギロルフィング家の大公について——」,『釧路工業高等専門学校紀要』第11号, 1977年 pp.181-202; 同「バイエルンの大公制」, 同『西欧中世軍制史論』1988年所収 pp.331-361.
- ③⑩ バイエルンにおけるボニファティウスの活動とその限界については、梅津孝「8世紀前半のバイエルンにおける教会組織の整備」,『史淵』第128号, 1991年 pp.37-68.
- ③⑪ 森義信「初期中世バイエルン史研究序説」p.194. バイエルンの4司教区への分割と、ボニファティウスによる司教に任命をめぐる様々な議論が存在するが、ここでは立ち入らない。梅津典孝「8世紀前半のバイエルンにおける教会組織の整備」pp.48ffを参照のこと。
- ③⑫ Brigitte Wavra, *Salzburg und Hamburg Erzbistumsgründung und Missionspolitik in karolingischer Zeit*, pp.120-134.
- ③⑬ Herwig Wolfram, *Die Geburt Mitteleuropas: Geschichte Österreichs vor seiner Entstehung*, pp.146-159; Brigitte Wavra, *Salzburg und Hamburg Erzbistumsgründung und Missionspolitik in karolingischer Zeit*, pp.120-134.
- ③⑭ Albert Werminghoff(hrsg.), *MGH., Concilia aevi Karolini*, II-1, Hannover, 1906(=MGH. Conc., II-1), pp.56-58, no.10. この教会会議の日付については、Wilfried Hartmann, *Die Synoden der Karolingerzeit im Frankenreich und in Italien*, pp.90f; Kurt Reindel, 'Bayerische Synoden im 8. Jahrhundert', pp. 3f.
- ③⑮ 教会法を尊重すること(4条)、貧者を抑圧しないこと(11条)などが大公や世俗の官職保有者らに直接呼びかけられている。
- ③⑯ 司教が修道院に対する支配権を持つことを明記した8, 9条など、この会議の決議の内容についてはWilfried Hartmann, *Die Synoden der Karolingerzeit im Frankenreich und in Italien*, pp.90-92; Kurt Reindel, 'Bayerische Synoden im 8. Jahrhundert', pp. 4-8を参照。
- ③⑰ 755年にヴェール Ver で開かれたフランクの教会会議決議(MGH. Cap., I, pp. 32-37, no.14)との内容的な類似が確認される。
- ③⑱ MGH. Conc., II-1, pp.93-97, no.15.
- ③⑲ MGH. Conc., II-1, pp.98-105, no.16.
- ④⑩ ディンゴルフィング教会会議とノISING教会会議の決議の内容に関してはWilfried Hartmann, *Die Synoden der Karolingerzeit im Frankenreich und in Italien*, pp.92-96; Kurt Reindel, 'Bayerische Synoden im 8. Jahrhundert', pp. 8-13.
- ④⑪ 「ディンゴルフィングと呼ばれる場所で聖なる教会会議が定めたことが、君主タシロ公により発布された」"Haec sunt decreta, quae constituit sancta sinodus in loco, qui dicitur Dingolwinna, domino Tassilone principe mediente." MGH. Conc., II-1, pp.93-97, no.15, p.91. ノISING教会会議決議の序文も同様の文言である。
- ④⑫ Wilfried Hartmann, *Die Synoden der Karolingerzeit im Frankenreich und in Italien*, pp.94f; Kurt Reindel,

'Bayerische Synoden im 8. Jahrhundert', pp.11f.

- (43) 両方の教会会議の決議は、バイエルン部族法典とともに伝えられている。Wulfried Hartmann, *Die Synoden der Karolingerzeit im Frankenreich und in Italien*, p.93.
- (44) ゲロルドはカールの2番目の正妻ヒルデガルト(783没)の兄で、アギロルフینگ家とも親戚関係にあった人物である。彼の辺境伯・ブラエフェクトゥス就任と同時に、大公制は廃止された。799年に死んだ彼の後任にはアウドゥルフが就いたが、817年ごろの彼の死後、825年のルートヴィッヒドイツ人王のバイエルン入りまで、バイエルンには単独の世俗的支配者は存在しなかった。これらの事情については、Herwig Wolfram, *Die Geburt Mitteleuropas: Geschichte Österreichs vor seiner Entstehung*, pp.187-195; 森義信「バイエルンの大公制」, pp.350f.
- (45) この時の経過については Herwig Wolfram, *Die Geburt Mitteleuropas: Geschichte Österreichs vor seiner Entstehung*, pp.189-192; Stephan Freund, *Von den Agilolfingern zu den Karolingern*, pp.160-182.
- (46) アヴァール戦役については Heinz Dopsch, 'Die Zeit der Karolinger und Ottonen', p.160; Herwig Wolfram, *Die Geburt Mitteleuropas: Geschichte Österreichs vor seiner Entstehung*, pp.253-260. バイエルンの高位聖職者たちも従軍しており、791年の戦いではレーゲンスブルク司教シントベルトが戦死している。
- (47) Stephan Freund, *Von den Agilolfingern zu den Karolingern*, pp.152-155.
- (48) *Ibid.*, pp.166-168.
- (49) 大司教昇格以前のアルノの経歴については、Heinz Dopsch, 'Die Zeit der Karolinger und Ottonen', pp.157f; Herwig Wolfram, *Die Geburt Mitteleuropas: Geschichte Österreichs vor seiner Entstehung*, pp.206f; Brigitte Wavra, *Salzburg und Hamburg Erzbistumsgründung und Missionspolitik in karolingischer Zeit*, pp.138f を参照。以下のアルノの経歴に関する叙述はそれらの部分をもとにしている。
- (50) その後も808年ごろまではサンタマン修道院長の職を放棄することはなかったと考えられるが、正確に何年までサンタマン修道院長の職を持ち続けていたのかに関しては議論がある。参照 Heinz Dopsch, 'Die Zeit der Karolinger und Ottonen', pp.158, n.16. 大公領内の司教座の司教とフランク王国内の修道院の院長を兼任しているということ自体が、タシロとカールの間に挟まれた彼の立場を表しているといえる。
- (51) ゼーベン(後にブリクセンへ司教座が移動)は伝統的にアキレリア総大司教の管轄下にあったが、ザルツブルクが大司教座に昇格した際にザルツブルクの属司教座とされた。ノイブルクは800年ごろにアウグスブルクと統合されマインツ大司教区の管区に移る。Brigitte Wavra, *Salzburg und Hamburg Erzbistumsgründung und Missionspolitik in karolingischer Zeit*, pp.136f.
- (52) *Ibid.*, p.135. 大司教区組織の復活・新設はカールの王国規模の教会改革政策の一つでもあった。
- (53) アルノの大司教座昇格に関しては、Heinz Dopsch, 'Die Zeit der Karolinger und Ottonen', pp.160f; Herwig Wolfram *Die Geburt Mitteleuropas: Geschichte Österreichs vor seiner Entstehung*, pp.208f; Brigitte Wavra, *Salzburg und Hamburg Erzbistumsgründung und Missionspolitik in karolingischer Zeit*, pp.134-140; Stephan Freund, *Von den Agilolfingern zu den Karolingern*, pp.195-207.
- (54) レーゲンスブルクは、ローマ時代末期にはすでにラエティア属州の大公 *dux* によって拠点とされており、その後もバイエルン大公の支配の中心地であった。Wilhelm Muschka, 'Regensburg- ein mittelalterlicher Bischofssitz besonderer Prägung', Thomas Martin Buck (hrsg.) *Quellen, Kritik, Interpretation: Festschrift zum 60. Geburtstag von Hubert Mordek*, Frankfurt am Main-Berlin-Bern-New York- Paris- Wien, 1999, pp.155-182, p.156.
- (55) レーゲンスブルクではなくザルツブルクが大司教座に選ばれたことをめぐっても、多くの議論がなされているが、ここでは立ち入らない。この問題に関しては註53の文献を参照のこと。

- 58 H. Mordek, 'Karolingische Kapitularien', pp. 59f; Wilfried Hartmann, *Die Synoden der Karolingerzeit im Frankenreich und in Italien*, p. 5.
- 59 Heinz Dopsch, 'Die Zeit der Karolinger und Ottonen', p.165; Herwig Wolfram *Die Geburt Mitteleuropas: Geschichte Österreichs vor seiner Entstehung*, p.209; 800年から802年までの間にアーヘンで何度教会会議が開かれたのかについては議論がある。その問題については Stephan Freund, *Von den Agilolfingern zu den Karolingern*, pp.218f.
- 60 Herwig Wolfram, *Die Geburt Mitteleuropas: Geschichte Österreichs vor seiner Entstehung*, p.210.
- 61 *MGH. Conc.*, II - 1, pp.258-273, no.36, p.259.
- 62 多田氏は、「王権が彼ら[司教ら聖俗貴族]との関係を更新し、民衆教化への意識を維持し、高揚させるため」の場としての教会会議の役割を強調している。多田哲「カロリング王権による民衆教化政策の展開」, pp. 25-28.
- 63 800年前後に特に集中して見られるアルノの国王の使節団内での活動については, Herwig Wolfram, *Die Geburt Mitteleuropas: Geschichte Österreichs vor seiner Entstehung*, pp. 208-10; Stephan Freund, *Von den Agilolfingern zu den Karolingern*, pp. 211-218.
- 64 これはアインハルトによるカールの伝記の最後の部分に付されているものである。國原吉之助訳・註『カロルス大帝伝』筑摩書房 1988年 pp.43-48.
- 65 五十嵐修「国王巡察使制度とフランクの国制」、『歴史学研究』第576号, 1988年 pp.101-110, p.103. すでにメロヴィング期から「巡察使 missi」は見られるが、カールの時代の巡察使は以前のものとは全く異なる役職であったようだ。723年の宮宰証書に見られる *missi discurrentes* は、主に王領地での貢租の徴収などに従事した役人に過ぎなかった。
- 66 *Capitulare missorum aquisgranense primum*, c. 6, "Ut ipsi sacerdotes unusquisque secundum ordinem suum praedicare et docere studeat plebem sibi commissam.", *MGH. Cap.*, I, pp.152-154, no.64, p.153.
- 67 彼は、バイエルンのブラエフェクトゥスであるゲロルド一世やアウドゥルフと共に活動している。バイエルンの他の司教では、レーゲンスブルク司教アダルヴィンが802年以降頻繁に巡察使として登場する。パッサウ司教ワルトリッヒ（位777-804）とフライジング司教アットがそれぞれ一度ずつ巡察使として言及されているが、アルノらと同じ、定まった管区を持った常設の巡察使としての活動だったのかは定かではない。Heinz Dopsch, 'Die Zeit der Karolinger und Ottonen', pp.165; Herwig Wolfram, *Die Geburt Mitteleuropas: Geschichte Österreichs vor seiner Entstehung*, p. 209; Stephan Freund, *Von den Agilolfingern zu den Karolingern*, pp.162f, pp.218-226.
- 68 Rosamond McKitterick, *The Frankish kingdoms under the Carolingians*, London & New York, 1983, p.95.
- 69 "Obsecro iterum iterumque ammoneo, ut te ipsum consideres; et quo tendas, agnoscas; et quid facias, praevideas; et coram quam terribili iudice rationem redditurus sis non solum de te, sed etiam de singulis animabus, quae tuo commissae sunt regimini. Ideirco non segniter labora; praedica oportune, importune id est volenti et nolenti, argue, obsecra, increpa...", *MGH. Epistolae*, IV, pp. 35f, no. 10, p. 36.
- 70 "...esto praedicator pietatis, non decimarum exactor...", *Ibid.*, pp. 153f, no. 107, p. 154.
- 71 ゼーベン司教アリム（位760年代後半?-800年ごろ）のことと思われる。アギロルフィング期, カロリング期共に、史料におけるゼーベンに関する言及は極めて少ない。ヴォルフラムはアルクインが特別に言及していることから、アリムがアングロ・サクソン人であった可能性を考えている。Herwig Wolfram, *Die Geburt Mitteleuropas: Geschichte Österreichs vor seiner Entstehung*, p.150.
- 72 "Saluta, obsecro, omnes fratres nostros in pace et caritate patremque nostrum Alimum episcopum et ceteros consacerdotes vestros. Hortare illos semper ad praedicationis officium. Memento, dum pallium accepisti ab

apostolica sede, maius te accepisse onus et debitorem esse omni personae et dignitati fiducialiter verbum Dei praedicare." *MGH. Epistolae*, IV, pp.319-321, no.193, p.321.

- ⑦① *MGH. Cap.*, I, no.22, p.55. 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年)の試訳」, p.129.
- ⑦② ライスバッハ, フライジnk, ザルツブルク教会会議は, 3ヶ所の決議が結合した形で伝えられているもので, 799年1月20日から, 場所を移動しつつ協議が行われた教会会議であると考えられている。なぜ場所を移動しながら教義が行なわれたのかは不明であるが, このような例は, 845/6年モー・バリ教会会議決議, 862年ビトル・ソワソン教会会議決議などにも見られる, Wilfried Hartmann, *Die Synoden der Karolingerzeit im Frankenreich und in Italien*, p.143; Reindel, 'Bayerische Synoden im 8. Jahrhundert', pp.13-18. 799年(または800年)に開かれたのは, ライスバッハ教会会議のみであり, その後一年おきにフライジnk, ザルツブルクで教会会議が開かれた, との見解も提示されている, Hubert Mordek-Michael Glatthaar, 'Von Wahrsagerinnen und Zaubern', *Studien zur fränkischen Herrschaftsgesetzgebung*, pp.229-260.
- ⑦③ *MGH. Conc.*, II-1, pp.196-201に見られる798年ライスバッハ教会会議の存在は現在では否定されている。Reindel, 'Bayerische Synoden im 8. Jahrhundert', p.13-15. Stephan Freund, *Von den Agilolfingern zu den Karolingern*, p.212 n.241.
- ⑦④ 表5を参照.
- ⑦⑤ 表5を参照.
- ⑦⑥ *MGH. Conc.*, II-1, pp.231-233, no.30.
- ⑦⑦ *Ibid.*, p.233, no.31.
- ⑦⑧ "...sanctam synodum episcoporum atque abbatum ceterorumque ecclesiasticorum virorum de provintia Baioariorum...", *Ibid.*, no.31, p.233.
- ⑦⑨ Theodor Bitterauf(hrsg.), *Die Traditionen des Hochstifts Freising*, I (744-926), München, 1905, 213f, no.231.
- ⑧① *MGH. Conc.*, II-1, p.234, no.32.
- ⑧② Theodor Bitterauf(hrsg.), *Die Traditionen des Hochstifts Freising*, I (744-926), 258f, no.299.
- ⑧③ 必ずしも大司教区会議の際に出されたとは考えない論者もいる。Reindel, 'Bayerische Synoden im 8. Jahrhundert', pp.13-15.
- ⑧④ Hartmann, *Die Synoden der Karolingerzeit im Frankenreich und in Italien*, pp.143f.
- ⑧⑤ R. Étaix, 'Manuel de Pastorale de l'Époque Carolingienne', *Revue Bénédictine* 91, 1981, pp.105-130 (Instructio Pastoralisのテキストは pp.116-123)。これは従来 *MGH. Conc.*, II-1, pp.198-201に編集された形で知られていたものである。エテの版では, MGH版で用いられていない写本も考慮に入れられている。
- ⑧⑥ *MGH. Conc.*, II-1, pp.205-219, no.24.
- ⑧⑦ Rudolf Pokorny, 'Ein unbekannter Synodalsermo Arns von Salzburg', *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* 39 1983, pp.379-394 (テキストは pp.390-394)。
- ⑧⑧ ボコーニーは806年のレーゲンスブルク教会州会議で読み上げられたものである可能性が高いとしている *Ibis.*, pp.388f.
- ⑧⑨ このテキストは, カピトゥラリアのように明確に条項に分けられているわけではないが, 編者であるボコーニーの区分(内容に従って5つに分けられている)に従う。
- ⑧⑩ 一般訓令第61条, 第82条などを参照。 *MGH. Cap.*, I, no.22, p.58, pp.61f; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民へ

の訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年) の試訳, p.138, pp.148-150.

- 00 "In hoc semper debet episcopus gregem suum admonere ut fidem rectam teneant, resurrectionem sanctam credant, diem iudicii timeant, recepturos se esse bona uel mala quae gesserunt credant, in hoc non dubitent." Past., c. 11.
- 01 "Et hoc consideret episcopus ... ut secundum traditionem romanae ecclesiae possint instruere, et fidem catholicam debeant ipsi agere et populos sibi commissos docere, missas secundum consuetudinem caelebrare sicut romana traditio nobis tradidit." Past c. 4. 典礼の際にローマの慣行を遵守することは一般訓令第80条でも求められている。MGH. Cap., I, no.22, p.61. 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年) の試訳, p.147.
- 02 "... ut praedicetur in populis, ut per exortationem et per suasionem vel per quamlibet occasionem hoc populus persuadere possimus," Conc. R. F. S. c. 5.
- 03 "Ut omnes presbiteri doceant populum devitare nefarium iuramenti usum,..." Conc. R. F. S. c. 5. 宣誓の慣行の統制については、一般訓令第64条も参照。MGH. Cap., I, no.22, p.58; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年) の試訳, pp.139f.
- 04 「枝の主日の前の土曜, 聖霊降臨祭の土曜, 9月の第3の土曜, 主の誕生に最も近い土曜」"...sabbato ante Palmas et sabbato sancto Pentecosten et tertia sabbati septimi mensis et in sabbato proximo nativitatis Domini..." Conc. R. F. S. c. 4.
- 05 「占いや予言の魔術について, そして天災や他の害悪を引き起こす人物について」"De incantationibus, auguriis vel divinationibus et de his, qui tempestates vel alia maleficia faciunt," の規定. そのような人物が発見された場合, 首席司祭が調査を行い, 罪を正すことが約束されるまでは牢に入れられることとされた. Conc. R. F. S. c. 15. 一般訓令第65条でも, 同様の者たちについて「このような者が居たならば, 彼らは矯正されるか, 断罪されるかなければならない」とされている。MGH. Cap., I, no. 22, pp. 58f. 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年) の試訳, p. 140f.
- 06 第23条は不正な結婚を避けるよう信徒に訓戒することを, 第46条は肉の交わりを否定した男女が離婚を試みる際の神判を定めている. 不正な結婚は一般訓令第68条でも禁じられている。MGH. Cap., I, no.22, p.59. 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年) の試訳, p. 142. なお, カロリング期における結婚に関する立法に関しては, Jean Imbert, *Les temps carolingiens. II, L'église: La vie des fideles*, Paris, 1996, pp.15-76.
- 07 "...ut exempla bona quae de illo procedant plus subditos doceant quam uerba." Past. c. 2. 模範的生活は, 説教と並んで信徒への教育において重視されていた. 一般訓令第72条も参照。MGH. Cap., I, no.22, pp.59f; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年) の試訳, pp.143f.
- 08 Past. c. 6 では, 訓戒が信徒に受け入れられやすくなるように司教が善行を示すこと, 司教が自身の生活態度にならって聖職者を教育することが, Conc. R. F. S. c. 39では助祭が模範となる生活を実践し, とりわけ酩酊を避けることが規定されている.
- 09 Past. cc. 3, 4. 一般訓令第78条も参照。MGH. Cap., I, no.22, p.60; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年) の試訳, p.146.
- 00 Past. c. 12, Conc. R. F. S. c. 17. 一般訓令第4条も参照。MGH. Cap., I, no.22, p.54; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年) の試訳, p. 127.

- ㉓ Conc. R. F. S. c.10. 一般訓令第5条では、聖職者のみならず信徒全員に利子付き貸与を禁じている。 *MGH. Cap.*, I, no. 22, p. 54; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年)の試訳」, p.127.
- ㉔ Conc. R. F. S. c. 38. 首席司祭は、「他の司祭たちを監督し、調査する」"perquirere ac perscrutari ceteros presbiteros" 立場におかれている。
- ㉕ "Episcopus unusquisque in ciuitate sua scolam constituat et sapientem doctorem, qui secundum traditionem Romanorum possit instruere et lectioni uacare et meditum discere,..." Past. c. 8.
- ㉖ *MGH. Cap.*, I, no.22, pp.59f; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年)の試訳」, pp.143f.
- ㉗ "...illos debeant admonere qualiter ipsi agant uel plebem doceant." Past. c. 13.
- ㉘ "... hoc inquirant qualiter uiuant et populum doceant uel baptizent,..." Past. c. 13. 同様の調査は一般訓令第70条でも要求されている。 *MGH. Cap.*, I, no.22, pp.59; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年)の試訳」, pp.142f.
- ㉙ Conc. R. F. S. c. 35. さらに Conc. R. F. S. c. 44 では、貴族が従軍逃れのために修道院長や司祭になることが非難され、司教の出席のもとで剃髪を理由を調査することが求められている。一般訓令第2条も参照。 *MGH. Cap.*, I, no.22, p.54; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年)の試訳」, p.126.
- ㉚ Conc. R. F. S. c. 31. 私有教会領主に不自由人として仕える司祭による弊害を軽減するための施策と考えられる。一般訓令第23条も参照。 *MGH. Cap.*, I, no.22, p.55; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年)の試訳」, p.131. 私有教会の教会改革・民衆教化に対する弊害については以下の註 ㉝も参照のこと。
- ㉛ 衣服において俗人と異なっていることや、武器を携帯しないことが求められた, Past. c. 7, Conc R. F. S. c. 9. 一般訓令第70条も参照。 *MGH. Cap.*, I, no.22, p.59; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年)の試訳」, p.137.
- ㉜ Conc. R. F. S. c. 3. 一般訓令28条も参照。 *MGH. Cap.*, I, no.22, p.56; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年)の試訳」, p.132.
- ㉝ Conc. R. F. S. c. 26. 一般訓令第10条も参照。 *MGH. Cap.*, I, no.22, p.55; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年)の試訳」, p. 128.
- ㉞ "... unusquisque episcopus consideret quod nihil sine metropolitano episcopo agat, et ad synodum constitutum in anno, ubi principes metropolitani constituerunt, non neglegant uenire." Past. c. 13. 一般訓令第8条, 第13条も参照。 *MGH. Cap.*, I, no.22, pp.54-55; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年)の試訳」, p. 128, p. 129.
- ㉟ Conc. R. F. S. c. 32.
- ㊱ Past. cc. 3, 4.
- ㊲ Past. cc. 14, 15. 一般訓令第3条も参照。 *MGH. Cap.*, I, no.22, p.54; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年)の試訳」, p.127.
- ㊳ Past. c. 10, Conc. R. F. S. c. 13, 37.
- ㊴ Conc. R. F. S. cc. 18, 19, 20, 21, 24, 25, 27, 28, 29, 40. なお、アルノの *Pastoralis* はもっぱら在俗聖職者にかかわる規定のみである。修道生活の徹底と世俗との分離は一般訓令26,27,52,73,77条でもそれぞれ規定されている。

- MGH. Cap., I, no. 22, pp. 56-57, p.60; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年)の試訳」, pp. 131-132, p. 136, pp. 144-146. 修道院に関するカロリング期の立法に関しては, Jean Imbert, *Les temps carolingiens. I, L'église: Les institutions*, Paris, 1994, pp.110-124.
- ⑩ 年代確定については Rudolf Pokorny, 'Ein unbekannter Synodalsermo Arns von Salzburg', pp.388f.
- ⑪ MGH. Cap., I, pp. 244-246, no. 124. リエージュ司教ゲルバルドゥスに宛てられたもののみが現存しているが, もともとは王国各地の司教・司教・修道院長に向けられたものと思われる. ここでは, 12月, 1月, 2月に3度行われる3日間の断食が命じられているが, それは毎年行われるものではなく, 特別にこの年のみ行われるべきものであった. アルノは断食のやり方についての文言のみ借用しており, 断食の行われる時期については独自の見解を述べている.
- ⑫ "...nunc reperta auctoritate sicut aliis diebus ieiunare licentiam esse, ... istis diebus ieiunare similiter." Serm. II. 29-31. ここで挙げられている「権威」とは, 現在失われたカールによる書簡, 又はカピトゥラリアであると考えられている, Rudolf Pokorny, 'Ein unbekannter Synodalsermo Arns von Salzburg', p. 391, n. 6.
- ⑬ "...qui voluerint aut quos exemplis vel blandis possimus sermonibus exortare..." Serm. II. 63f.
- ⑭ "...non pro infirmitate aliqua neque pro variis aliis eventibus..." Serm. II. 80f.
- ⑮ "...ad malos viros aut feminas aut ad auguriatrices aut maleficas aut incantatores aut falsas scripturas aut ad arbores vel ad fontes auf alicubi," Serm. II. 81f.
- ⑯ "Clamant ad presbyteros seu clericos "Tunc me hodie carnem manducare et canta mihi unam missam vel psalmos tantos" et nolunt datam penitentiam observare." Serm. II. 88-90.
- ⑰ 異教慣行への対処については, 上述の註⑨も参照. カール大帝による私有教会対策については, 吉田道也「私有教会聖職者とフランク国王の立法」, 『法政研究』第16巻, 第3・4合併号, 1949年 pp. 151-215, 特に pp. 189-200.
- ⑱ 年代確定と著者の問題については, MGH. Cap. episc., III, p.192.
- ⑲ このテキストは Concilium Baiuvaricum として MGH. Conc., II- 1, pp. 51-53 にて刊行されていたものである.
- ⑳ "Quia igitur, dilectissimi nobis, propter honorem domini nostri Iesu Christi ad istam sanctam solemnitatem convenistis, oportunitate nobis videtur, ut ea adnuntiemus, quae sancti patres et fratres nostri ecclesiastici viri in eorum statuerunt concilio observandum", MGH. Cap. episc., III, p. 194.
- ㉑ 直接この司教カピトゥラリアのもとになった教会会議の決議は残されていない, MGH. Cap. episc., III, pp.191.
- ㉒ 第1条, 第2条の前半, 第3-5条, 第6条の前半, 第7-9条, 第11-15条.
- ㉓ 序文, 第2条の後半, 第6条の後半, 第10条, 結語.
- ㉔ MGH. Cap. episc., III, pp.189-198.
- ㉕ MGH. Cap. episc., III, pp.216-230. 以前までは *Capitula Frisingensia* の名前で知られていた史料である.
- ㉖ "Ut pessimum usum iuramenti omnimodis vitare studeant." Cap. B. c. 7.
- ㉗ "antequam presbitero suo adnuntiet et parentibus suis et vicinis," Cap. B. c. 12.
- ㉘ "Ut modia iusta ceterasque mensuras vel stateras habeant." Cap. B. c. 14.
- ㉙ "Ut peregrinos et hospites in domos suas recipiant." Cap. B. c. 15.
- ㉚ みだりに宣誓することの禁止については, 註⑨を参照.
- ㉛ ただし799年の大司教区会議では近親婚の禁止を訓戒することが定められただけであったのに対し, ここではより実践的な方策がとられている.

- ④④ *MGH. Cap.*, I, no. 22, p. 60; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年)の試訳」, p. 145.
- ④⑤ *MGH. Cap.*, I, no. 22, p. 60; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年)の試訳」, p. 145.
- ④⑥ "Ut ieiunia per feriam IIII et VI in usum adsumant." *Cap. B. c. 9.*
- ④⑦ 大司教区レベルの史料において、聖職者が水曜と金曜の断食を行い、信徒に対してはそれを模範と説教で勧めるべきであるとされていたことを反映しているものと思われる。
- ④⑧ "in sabbato ante palmas et in sabbato pentecosten et in sabbato IIII. istius mensis seu ad istam festivitatem et in vigilia notale domini." *Cap. B. c. 10.* この祝日とは、この司教カピトゥラリアが読み上げられている時、つまり司教区の守護聖人の祝日（レーゲンスブルクの場合9月22日の聖エメラムの祝日、ザルツブルクの場合9月24日の聖ルベルトの祝日）をさすものと考えられる。これについては *MGH. Cap. episc.*, III, p. 192. ここでは799年の大司教区会議第4条を踏まえつつも、当該司教区の適する形にその期日が改変されている。上述の註④④を参照のこと。
- ④⑨ 「[信徒たちは]聖別式が行なわれるこれら四季の斎日の水曜と金曜に、第9時まで断食を行い、土曜日にはこの時間に教会に来るべきである」"Ut ista quattuor consecrationis tempora IIII et VI feriam ieiunent usque ad nonam et in sabbato ad ecclesiam in ipsa hora perveniant." *Cap. B. 11.*
- ④⑩ *Cap. B. c. 1.* 司教区会議への俗人の参加を求める規定はカロリング期には他に類例を見ないものである。 *MGH. Cap. episc.*, III, p. 194, n. 5. この条項で「教会会議」sancta synodusは、「聖職者たちが信徒たちのために、いかにして魂が救われるのかを助言するとき」"quando pro eis iniunt consilia, qualiter salvari possent animas eorum" であるとも述べられており、それが民衆教化の行われる場として機能することも期待されている。
- ④⑪ *Cap. B. c. 3.* 聖体拝領の頻度やミサへの出席が要求されることはあっても、教会に頻繁に通うことそのものが信徒に要求されることは稀である。
- ④⑫ *Cap. B. c. 13.* 酩酊の回避は、799年の大司教区会議第39条（助祭に対して）のように、聖職者に対して規定されることは比較的多かったが、俗人にも適用される例は少ない。
- ④⑬ *Cap. B. c. 6.* ただし、毎週の聖体拝領がフランク王国の中心部で実際に行なわれていたのかどうかは疑わしい。たとえば813年のツール教会会議第50条は年に3度の聖体拝領を要求するにとどまっている、*MGH. Conc.*, II-1, pp. 286-293 no. 38, c. 50, p. 293.
- ④⑭ *MGH. Cap. episc.*, IIIで初めてこの名称が用いられた。
- ④⑮ Peter Brommer, *Capitula episcoporum: die bischoflichen Kapitularien des 9. und 10. Jahrhunderts*, p. 57.
- ④⑯ 年代確定と著者の問題については、*MGH. Cap. episc.*, III, pp. 219f. ポコーニーは第9条で皇帝ではなく国王の宮廷が言及されていることなどから、ルートヴィッヒドイツ人王がバイエルン王として統治を始めた825年以降に作成されたと推測している。
- ④⑰ "Volumus, ut unusquisque presbiter baptismalis ecclesiae ista praenotata capitula secum habeat in pergamenta scripta, quatenus, cum deo adiuvante pervenerimus ad suam ecclesiam, nostras admonitiones et iussiones in se ipso populisque sibi subiectis adimpleta esse repperiamus." *MGH. Cap. episc.*, III, pp. 230.
- ④⑱ バイエルンにおいては、アルノの次の世代である820年代以降の時期に、司教座・修道院における筆者活動がそれまで以上に活発化したことが明らかになっている。Freund, *Von den Agilolfingern zu den Karolingern*, pp. 236-239. この時期には、小教区司祭による民衆教化活動も、単純な教義を民衆に説教するだけでなく、手引書や説教集を



用いて行われるようになったものと思われる。Capitula Frisingensia III が作成された時期の教会改革と民衆教化政策のバイエルンにおける展開については、稿を改めて論じる予定である。

- ⑭ "...super duas seu tres ebdomadas diebus dominicis seu festivitibus sanctorum..." Cap. F. III. c. 6.
- ⑮ "... post evangelium perlectum ..." Cap. F. III. c. 6.
- ⑯ Past. c. 4 条では、正しい書物とはどのようなものであるかに注意する役目が司教に与えられていた。
- ⑰ 「聖なる福音、聖句集、聖なるカノン、秘蹟の書物、洗礼の書物と贖罪規定書、司牧者の書物」"evangelium sanctum ... lectionarium sacrosque canones atque librum sacramentorum necnon et baptisterium et libellum poenitentialem simulque librum pastorum," Cap. F. III. c. 32.
- ⑱ 「いかなる司教も、自由人の教会を、私の同意と助言なしに、封として受け取ってはならない」"nullus presbiter ecclesiam liberorum hominum absque nostro consensu et consultu in beneficia recipiat," Cap. F. III. c. 22.
- ⑲ 第8条では配下の司教と共に民衆を教育する役目を持った人物として「首席司教」archipresbiter が言及されている。第14条では「洗礼教会の司教」presbiteri baptismalis ecclesie が従属する司教たちによって敬われるべきであるとされている。どちらも通常の司教の上位に位置していることが明らかであるが、「首席司教」と「洗礼教会の司教」が同義で用いられているのかどうかは明確ではない。首席司教については、799年の大司教区会議第8条でも言及されている。上述の註⑭を参照。
- ⑳ 第35条については上述の註⑭を参照。第36条は、第35条とほぼ同じ内容を繰り返している。
- ㉑ 司教による巡察については、五十嵐修「教会巡回裁判の誕生——カロリング期における公的秩序と教会——」、『西洋史学』第184号、1997年 pp. 1-17, pp. 6-8。
- ㉒ 聖職者に対する調査についての規定については註⑭を参照。
- ㉓ MGH. Cap. I, pp. 109-111, no. 38.
- ㉔ MGH. Cap. episc., III, p. 208.
- ㉕ Ibid., pp. 199-205. これは *Quae a presbyteris discenda sint* として MGH. Cap., I p. 235 にて国王のカピトゥラリアとして刊行されていたものである。
- ㉖ Ibid., pp. 206-211. このテキストは *Capitula de examinandis ecclesiasticis* からの抜粋のみで構成されるものである。
- ㉗ Ibid., pp. 212-215. MGH. Cap., I, pp. 234f で国王のカピトゥラリアとして刊行されていたもの。
- ㉘ このテキストを伝える唯一の写本はレーゲンスブルクで作成されたものである。ポコーニーは、レーゲンスブルク司教アダルヴィンが803年にトゥールへ巡礼に訪れた旅の途中でオルレアンから持ち帰ったテキストであるという可能性を推測している。Ibid., p. 213.
- ㉙ 'iussa sunt docere omnes ecclesiasticos.' Ibid., p. 204.
- ㉚ Capitula Frisingensia I が聖職者によって学ばれるべきことの列挙であるのに対し、Interrogationes examinationis は司教に対する質問の形をとっている。
- ㉛ 「司教たちは、自己の教区の中の司教たちに、彼らの信仰、洗礼[の方法]、ミサの挙行[法]について問い質して調査すべきである」MGH. Cap., I, no. 22, p. 59; 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis) (789年)の試訳」, pp. 142f.
- ㉜ 写本については Hubert Mordek, *Bibliotheca capitularium regum Francorum manuscripta. Überlieferung und Traditionszusammenhang der fränkischen Herrschererlasse*, pp. 364-367. MGH の編集者であるポコーニーは Capitula Frisingensia II の作者(編者)をフライジック司教アットと推測している。MGH. Cap. episc., III, p. 208.
- ㉝ このテキストをめぐる議論については MGH. Cap. episc., III, pp. 206f を参照。

⑧ *Ibid.*, p. 208.

⑨ 例えばエテは「このテキストは2度繰り返して Clm 28135 の中に書き写されている」と述べ、両方のテキストの関係性に注目していない。R. Étaix, 'Manuel de Pastorale de l'Époque Carolingienne', p.114.

⑩ *MGH. Cap. episc.*, III, pp. 207f.

⑪ 例えば第6条の「[司祭たちは]どれだけその司教に従順であるか、どの程度彼ら相互の間に尊敬、平和、慈愛が存在しているのか」"Quomodo oboedientes sint episcopis suis, qua verecundia et pace vel caritate inter se invicem vivant." という質問は、巡察使や大司教が司教に尋ねる場合には意味を持つが、司教が司祭や下位の聖職者に尋ねる場合には適さないものである。

⑫ その内容は、詩篇の知識、ローマの慣行に従った定時課について、洗礼志願者への教育と随意ミサについて、説教と聴罪について、模範的生活について、司祭の信仰の内容と信徒へ教えているものについて、主の祈りと信条の理解と教育について、教会法・詩篇・ホミリーの所有と理解（民衆に教えるため）についてである。

⑬ 上述の註⑧、⑨を参照。

⑭ Wilfried Hartmann, *Die Synoden der Karolingerzeit im Frankenreich und in Italien*, pp. 149f.

⑮ 800年以前に関しては767年と783-793年の間の2回のみ、830年から10世紀初めまでの期間に関しては850年、860年、908年の3回のみが知られている。*Ibid.*, pp. 149f.

⑯ フライジングの状況のみが明らかになっている背景には、史料の残存状況がある。フライジングでは、司教ヒット(811-835)の時代以後作成された、8世紀中ごろにまでさかのぼる証書集がほぼ完全な形で残されているのである。

⑰ たとえばカールは793年に、親アギロルフィング的な家門に属していたグラーフ Helmuni の財産を承認する条件として、フライジング教会へその一部を寄進させている。カールは在地有力家門からの財産没収を断念することで彼らとの融和を図るとともに、司教座を通じてバイエルンへの支配を貫徹することを試みていると考えられる。そのような動きの中で司教座は一定の富を蓄えることとなった。Stephan Freund, *Von den Agilolfingern zu den Karolingern*, pp. 171-175.

⑱ *Ibid.*, p. 224, pp. 337f. この時期に進んだと考えられる司教座への私有教会の集積や在地貴族層からの司教座への寄進の増大に関しては更なる研究が必要であると思われる。

⑲ 教会による一般信徒への影響力強化に関しては、十分の一税の義務化と小教区組織の発展が重要な問題であると思われるが、バイエルンについては必ずしも十分に検討がなされているわけではない。ヴォルフラムはザルツブルク大司教区を対象としたこの種の研究の不在を指摘している。Herwig Wolfram, *Die Geburt Mitteleuropas: Geschichte Österreichs vor seiner Entstehung*, p. 205.

⑳ 9世紀第二四半期は、バイエルンが副王国としてルートヴィッヒドイツ人王に与えられ(825年)、再び政治的にもひとつのまとまりを形成する時でもある。その時期のバイエルン教会と教会改革の展開については、筆者の今後の課題としたい。また、表1-3からは、王国中心部で9世紀後半に多くの手引書写本、司教カピトゥラリアを含む写本が作成されたことが明らかとなっている。従来の研究はカール大帝期やルイ敬虔帝期の前半のみが対象とされる傾向にあったが、今後は王権の衰退する9世紀後半の改革の展開をも視野に含めた研究が必要とされるであろう。そこから得られる知見と、バイエルンにおける教会改革の展開をつき合わせることによって、バイエルンの持つ地域的特質への洞察もさらに深まることと思われる。